

共同住宅建設に伴う
若江北遺跡第4次発掘調査報告



溝14出土の線刻土器

2001.12
財団法人東大阪市文化財協会

共同住宅建設に伴う
若江北遺跡第4次発掘調査報告



若江北遺跡周辺の航空写真 南西から

2001.12
財団法人東大阪市文化財協会

目次

例 言	3
I.はじめに	5
II.調査の方法	6
III.層序	8
IV.遺構と遺物	9
第1面	9
第2面	13
第3面	36
第4面	42
V.自然化学分析	46
VIまとめ	48
参考文献	53
報告書抄録	54

例言

- 1.本書は、平成3年度に財団法人東大阪市文化財協会（以下協会）が、石山康一・石山昌広両氏から委託を受けて実施した、共同住宅建設に伴う若江北遺跡第4次発掘調査の結果報告である。
- 2.現地調査は、平成3年1月31日から平成3年6月12日まで実施した。
- 3.調査は、池崎智詞が担当した。現地調査には、調査補助員として岩倉三和子・大西昭彦・奥山哲也・加藤嘉隆・菅原祐二・鶴田政樹・前田秀則・松岡秀光・松崎剛資らが参加し、本書作成には、整理補助員として荒木陽子・伊藤利香・岩倉三和子・奥山哲也・加藤嘉隆・坂口真也・島田淑子・菅原祐二・武田慎平・丹野智之・鶴田政樹・中谷忠稔・永村明良・西村慶子・長谷山悦子・東口一彦・日野菊美・前田秀則・明神嘉鶴・室田都英・山村然三（敬称略・五十音順）らが参加した。
- 4.本書は池崎が執筆編集した。
- 5.基本的に遺構写真および遺物写真の撮影は池崎が行った。一部遺物写真是、スタジオG.F.プロに委託して行った。
- 6.調査地の基準点設置は、国際航業株式会社に委託して行った。
- 7.出土遺物の保存処理は元興寺文化財研究所に委託して行った。
- 8.出土した種実の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。
- 9.現地調査に際して、石山康一・石山昌広両氏および、株式会社島田組・建设和建設株式会社に御協力いただいた。記して御礼申し上げます。
- 10.今回掲載した遺構図および遺物実測図のトレース作業はすべてコンピュータ上にておこなった。
- 11.遺物は、基本的に写真と実測図を並記するように心がけた。しかし一部の遺物については、紙数の関係でそのどちらかを割愛したものもある。
- 12.遺物実測図は、図から最低限の情報を得られるように法量・調整などを記号化し記載した。凡例は各図中に示した。

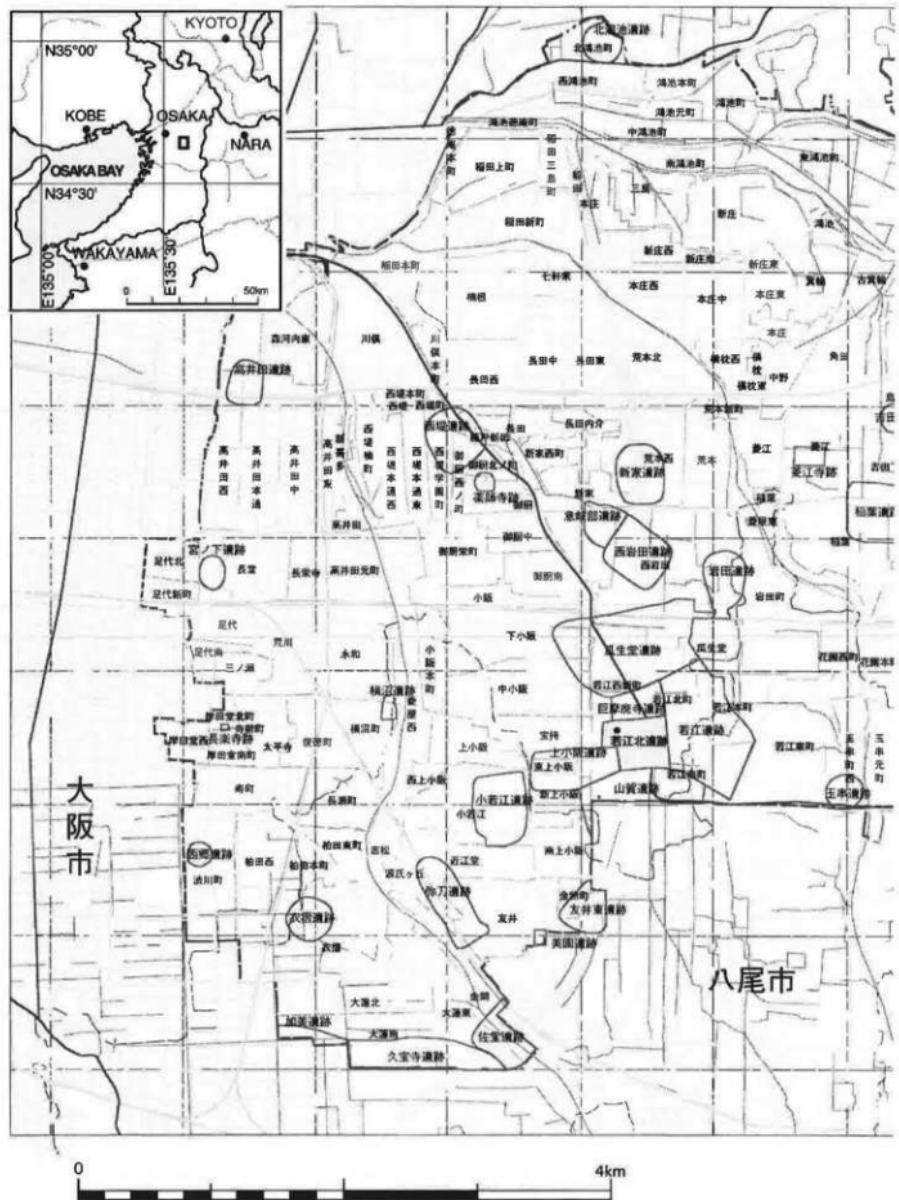


図1 若江北遺跡周辺の遺跡分布図

I. はじめに

若江北遺跡は、昭和9年の楠根川改修工事の際、弥生土器・土師器・瓦器等が出土したことによって周知された。また昭和46年に行われた楠根川改修工事に際しても、遺跡の所在が再確認された。

東大阪市では、昭和49年に実施されたガス工事に際して、発掘調査がはじめて行われて以後、現在に至るまで行われた発掘調査は8回を数える。その多くは、下水道やガス管の埋設工事に伴うものであり、面的に調査を行ったものは、今回の調査と3次調査（学校法人樟蔭東学園内校舎増築に伴う調査。昭和57年度、報告書既刊）のみである。

3次の調査は、現在の遺跡範囲では巨摩庵寺遺跡に含まれるが、弥生時代中期末ごろの水田跡をはじめ、弥生時代中期末から古墳時代初頭の自然流路および堤跡・中世後半から末の土塁群・16世紀以降に開発された、土地区画等とともに、それらの遺構・包含層に伴った土器や木器などの遺物を検出した。

若江北遺跡周辺には、北に巨摩庵寺遺跡・東に若江遺跡・南に山賀遺跡・西に上小阪遺跡が隣接している他、瓜生堂遺跡や小若江遺跡・友井東遺跡・美園遺跡にも近接している。

これらの遺跡は、旧大和川の分流路（例えば小阪合・若江分流路、巨摩庵寺・若江分流路など）などの埋没や堆積活動によって形成された、高まりおよびその高地間低地の上に発展した遺跡である。

各々の遺跡に残る人間活動の痕跡は、各遺跡よって時期的な消長が見られるものの、縄文・弥生時代から近世に至るまで幅広い。換言すれば、当遺跡周辺が人間活動を行う上において、必要な条件を満たした地域であつことが伺える。

図2 若江北遺跡位置図



今回の発掘調査が終了した平成3年以降、現在（平成13年）までの10年（特に平成8年以降）の間にも、調査地周辺、特に府道四條長堂線沿いの部分では、新しい店舗が立ち並び、調査当時と様相が一変しているが、それらに伴った面的な調査は行われてはいない。

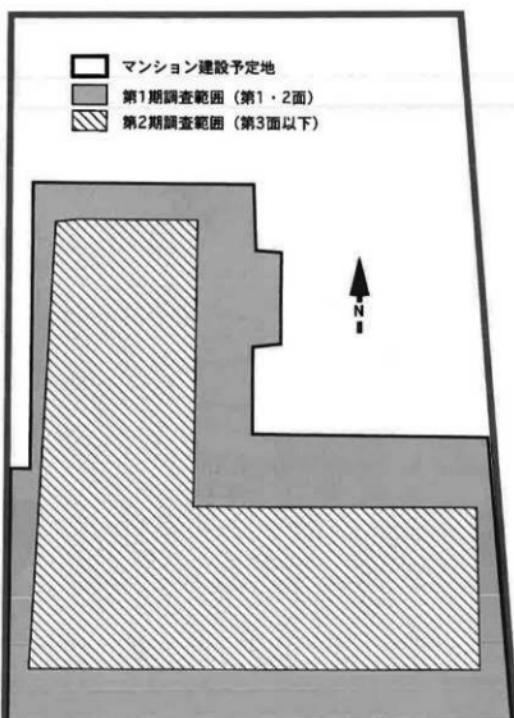
先に東大阪市では面的な調査は2回であると述べたが、大阪府では遺跡範囲の中央を南北に縦断する近畿自動車道天理～吹田線の建設に際して、その予定地内の発掘調査を昭和54年・昭和57年・平成4年・平成5年・平成7年の5回実施している。

大阪府の調査では、縄文晩期以降弥生時代前期中葉以前に活動した自然河川跡をはじめ、その河川埋没後に始まる人間活動の痕跡や水田・竪穴住居や掘立柱建物などの居住空間のほか、弥生時代中期の水田・埋葬施設、後期の自然河川や埋葬施設・水田、古墳時代前期以降の水田面など、人間の居住・埋葬・生産活動の痕跡を検出した。

また、多数の土器や木器等遺物とともに、被火災倒壊した弥生時代中期の建物がそのまま出土したことなどは、当時の建築構造がわかる資料として重要である。

II. 調査の方法

今回の調査地は、近鉄八戸ノ里駅から直線距離で南東に1.1Km、大阪府道大



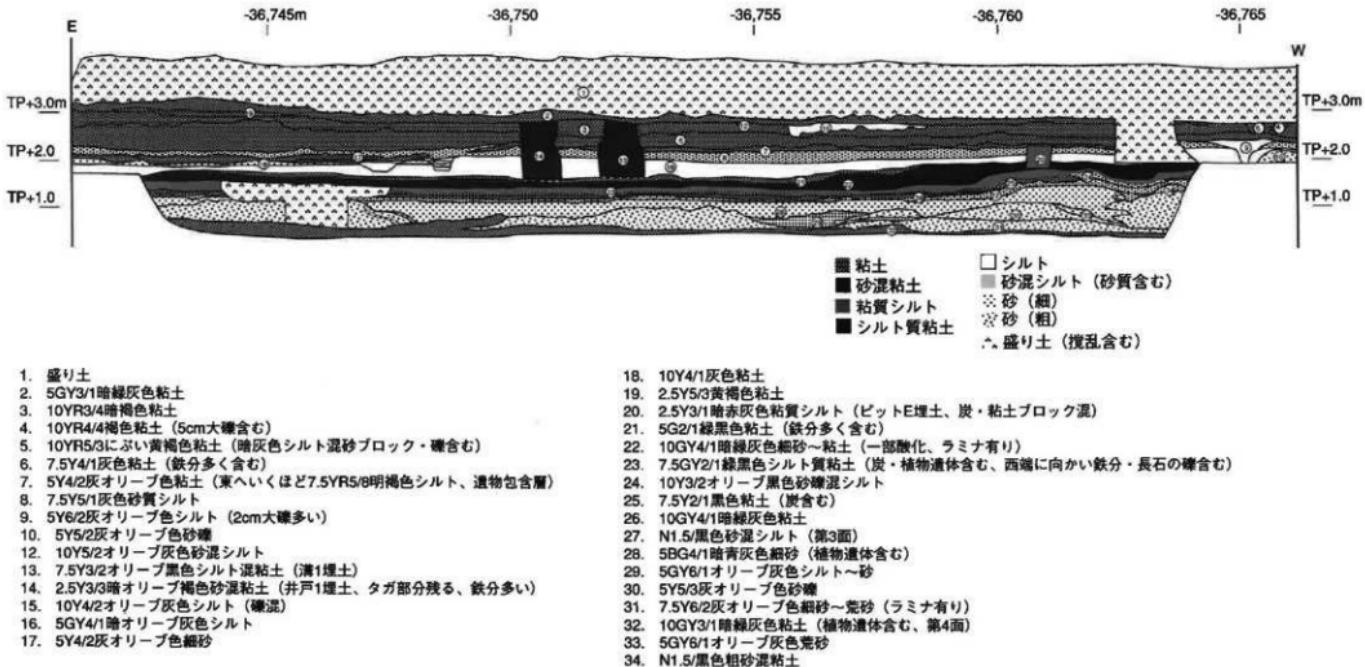


図4 トレンチ南壁断面図



図 5 第1面遺構検出状況
南から

阪中央環状線と大阪府道四條長堂線（以下四條・長堂線）の交わる巨摩橋の交差点を約250m、四條・長堂線沿いに西に入った北側にある。学校法人樟蔭東学園の西側に隣接し、地籍では東大阪市若江西新町3丁目12-4・12-7にあたる。

今回は共同住宅建設に伴うものであり、建物建設に伴って破壊される部分について発掘調査を行った。

発掘調査に先立って東大阪市教育委員会文化財課（以下市教委）によって行われた試掘調査では、現地表面から下に約4.5mまでの間に1面の遺構面と2つの遺物包含層を確認した（図102）。試掘データに従って、マンションの基礎構造・調査経費を念頭に協議した結果、上部（1期）・下部（2期）の2回に分けて調査を行うことになった。（図3）

第1期調査は、建物建設に伴う掘削で破壊される、現地表面から2.1m下までの部分について、約600m²の建物建設予定地全面を、第2期調査は、それ以下4.5mまでの部分で、基礎杭によって搅乱される範囲のみを、約320m²の広さでL字形状に設定した。

第1期調査は、現地表面から約1.4m部分を機械によって掘削し、以下0.7mの遺物包含層部分を人力により掘削した。また第2期調査は、1期調査終了面から1.2mを機械によって掘削し、以下0.9mについて人力により掘削を行った。



図 6 溝1検出状況
南から
手前は井戸2

III. 層序

今回調査によって確認した層序は以下の通りである（図4参照）。なお調査区の中においても、観察する部分によって層序に若干の違いが見られるが、ここに述べる層序は第1・2期を通じて観察することのできた南壁の断面によるものである。（実際には1期2期で若干断面位置のずれ、2期は1期より約3.5m北へ移動）はあるが、双方を図面上で合成し、層序の復元を行った。)



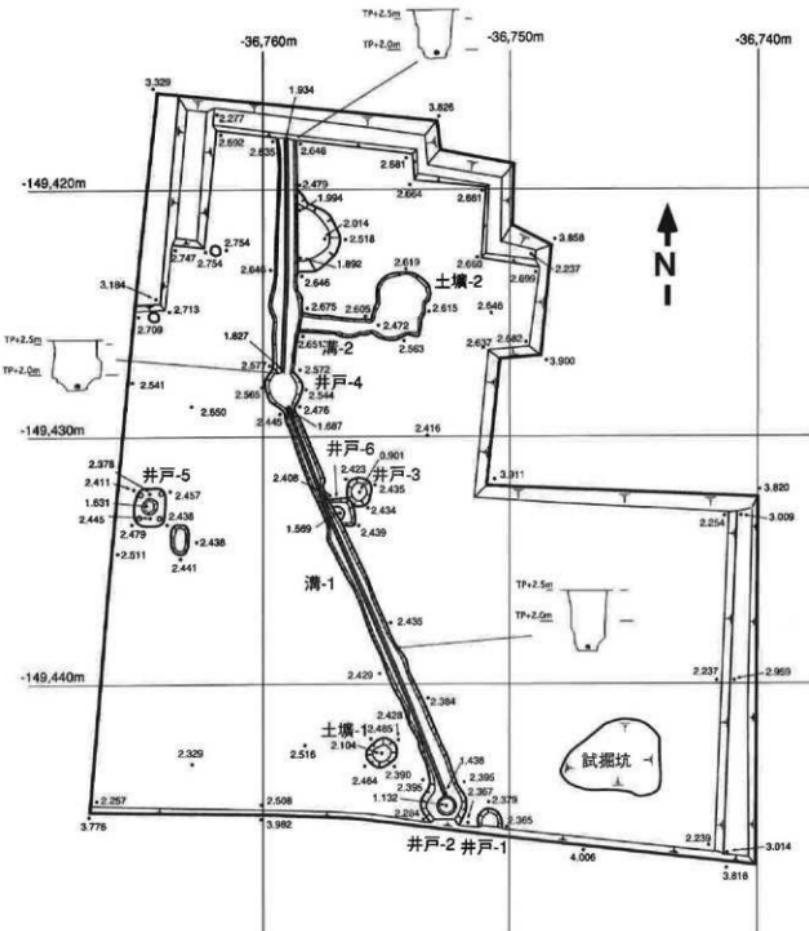
図 7 竹管ジョイント部分

第1層	盛り土	約1.5mではほぼ全面に堆積
第2層	暗緑灰色粘土	旧耕土
第3層	暗褐色粘土	近世の遺構面（第1面）
第4～5層	灰～灰オリーブ色粘土	中世～古墳時代の遺物包含層
第6層 上	暗オリーブ灰色シルト	古墳時代初頭の遺構面（第2面）
下	灰色砂質シルト	（第2面下層）
第7～9層	暗オリーブ～緑黒色シルト～粘土	
第10層	黒色粘土	弥生時代後期の遺物包含層
第11層	暗緑灰色粘土	
第12層	黒色砂混粘土	弥生時代後期の遺構面（第3面）
第13～14層	暗青灰色～灰オリーブ色細砂～砂礫	
第15層	暗緑灰色粘土	弥生時代中期の遺構面（第4面）

IV. 遺構と遺物

今回は前述の通り1期・2期の2回に分けて調査を行い、合計4面の遺構面を確認した。ここでは、検出した遺構面を新しい時代から第1面とし、検出中最古の遺構面を第4面とし、以下より記載する。

図8 第1面遺構平面図



第1面

盛り土下にある旧耕土直下 (TP+2.5m) で検出した。暗褐色の粘土層をベースとするこの面からは、5基の井戸のほか、節を抜いた竹を管として使用した導水施設・土壙・ピットなどを検出した。

溝1(導水施設)

溝1は、トレチのほぼ中央部に位置し、南北にトレチを縱断する。トレチ中央部にある井戸4を経由し、トレチ南端部にある井戸2に至る。

溝の北端部は、トレチの北端よりさらに外側に伸びる。南端部分はトレチ南端部で井戸2に取り付くが、井戸2の北側に認められた竹管が、南側には認められないことから、南への延伸は無いものと考えられる。したがって本来の規模は不明であるが、検出した規模は、幅は上端 0.65 ~ 0.7m、下端 0.4m、深さ 0.7 ~ 0.9m、長さ 60m を呈する。

溝の底部には小さな犬走りを造り、さらに一段掘り込んだ部分に、節を抜いた竹を管として繋ぎあわせたものを据える。

逆凸の字の断面を呈した溝の掘り方はいびつで、多量のブロック土によって充填された埋土には、自然堆積の痕跡は認められない。したがってこの溝は、開削直後人為的に埋め戻されたと考えられ、管を埋設するために開削された溝であることがわかる。

北端部には井戸など水源となる施設は認められなかったが、中央と南端に2基の井戸が取りつき、検出全長 60m における管天部分の比高が、北端部分 (TP+1.965m) と南端部分 (TP+1.490m) で約 0.48m あることから、この溝は北から 0.8% の勾配で、浄化施設として井戸4を経由し、そこで浄化された上水を、南端の井戸2へ供給した導水施設ではないかと考えられる。

管として使用されたのは、一本あたり長さ 1m ~ 1.2m、直径約 6 ~ 8cm の青竹で、根元付近の太い部分に、もう一方の竹の先の細くなつたところを差し込んで連結していた。また管は、井戸4以北と以南で作り方に違いが見られる。以北の管は、竹を半裁し、節を抜いた後に元通り合わせ、管にしたものを使用するに対し、以南の管は、半裁せずに節だけを抜き使用する。検出時、両者とも竹の内部は砂泥で充填されていた。

遺物は、弥生土器甕・壺・高杯や須恵器壺等のほか、陶磁器や瓦・瓦器などが出でたが、細片のため図化可能なものはない。弥生土器や須恵器は、溝掘削の際に掘り込んだ、下位の包含層から混入したものと考えられる。

出土した陶磁器から、溝の埋没時期は近世以降と考えられる。統一して、この導水施設に付随する2基の井戸について述べる。(井戸の名称は宇野 1982 にしたがった。)

井戸2

導水管南端部に取り付く井戸2は、直径 1.8m の円形の掘り方を呈し、深さは 1.4m (上面が削平を受けており、検出面が掘り込み面ではないことから、本来の深さおよび上部構造 (井枠部分) の有無は不明である)。溝1掘削時に同時に掘られている。掘り方の形状は二段掘りで、堆積土層の観察からは、西側は検出面より 0.4m 下、東側は同じく 0.8m 下の部分で段を設け、直径 1.25m の

図9 井戸2全景 北から



穴を掘削したことがわかる。その内側中央に、直径0.78mの円形を呈する井戸側痕跡を検出した。

井戸側は、竹製のタガを3条分を確認したことから、縦板組タガ巻きであったと考えられるが、縦板部分が全て欠損しており本来の姿は推測の域を出ない。

タガは3本の割竹を結って一条のタガとし、井戸検出面から下に0.25m・0.6m・0.92mの部分で認められた。

井戸側内面の堆積土層とタガ内側との間に、腐食土層など木質遺物の存在を示す堆積土が認められないことから、この井戸が埋没する時にはすでに、縦板は抜き取られていたと考えられる。

タガの外側には一枚だけ縦板が張り付いた状態で検出されたが、タガの周囲にはこれ以外縦板は認められない。したがって、本来この井戸側に使用されていた縦板かどうかは不明である。

井戸側の北側、座標北に対し西に22度、検出面から0.87m下の位置に、北から溝1の中を延びた竹管が取り付く。井戸側南面には管の痕跡や穿孔された痕跡も認められない。このことから、この井戸が導水施設の南端部分とも考えられるが、井戸以南の部分は、調査範囲外であるため、詳細は不明である。

遺物は、瓦、須恵器・土師器・染め付けなどが出土したが、細片のため図化可能なものはない。

井戸4

井戸4はトレント中央北寄に位置し、溝1の方向を若干東に振る起点となる。

直径1.5mの円形を呈し、深さは1.4m。上面が削平を受けていることから、検出面は掘り込み面ではなく、実際の深さは不明である。

検出時点では井戸側の存在は認められない。しかし、溝との取り付き部分をみると、溝の堆積土と、井戸の堆積土とは、明瞭な違いが認められることから、本来的には井戸側を持っており、廃絶時に取り去ったのかもしれない。井戸内部からは平瓦が複数出土していることから、井戸側の一部、もしくは、井桁の部分に瓦が使用されていた可能性も考えられる。しかし瓦以外全く痕跡が認められないことから、井戸側形態の詳細は不明である。

井戸の北側には、TP+1.827m（管天）の部分に、北から延びた竹管が取り付く。井戸の南側は、TP+1.687m（管天）の部分で、座標北より22度東へ振った所に、南へ延びる竹管が取り付く。

遺物は、土師器・須恵器や染め付けなどの陶磁器細片のほか、前出した平瓦・枠瓦・瓦管などが出土した。

瓦管は、井戸内に落ち込んだ状態で検出したが、井戸内部で竹管のジョイントに使用されたものか、他所で使用されたものをここに投棄したものか、明確にはできない。

その他の遺構・遺物

井戸1

井戸1はトレント南端部、井戸2の東隣に位置する。南半分がトレントの外側に広がる。直径は1mの円形を呈し、深さは1.3m以上。井戸側ではなく、素掘りの井戸と考えられるが、出土遺物に枠瓦が含まれることから、井戸側の存在を完全に否定できない。



図10 井戸4北側
北東から



図 11 井戸 3・6 西から

手前が井戸 6

出土遺物は、杵瓦・鉄釘・染め付けなどである。時期は、近世以降と考えられる。

井戸 3

井戸 3 は、井戸 4 の南東約 4m に位置し、南西部に隣接する井戸 6 の一部を削って作られる。

南北 1.2m・東西 1m の不整円形を呈する。検出時点では井戸側は認められない。深さは 1.5m であるが、上面が削平されており、検出面が掘り込み面ではないことから本來の規模は不明である。遺物の出土はない。出土遺物がないため時期の詳細は不明であるが、他の遺構との切合い関係から、井戸 6 よりは新しく、溝 1 とほぼ同時期と考えられる。

井戸 6

井戸 6 は、井戸 3 の南西に隣接し、埋没後北東角を削られる。また、西半分を溝 1 に斜めに削られる。上面が削平されていることから本來の規模は不明であるが、検出規模より推定復元すると、上部は 1 辺 1.1m の隅丸方形を、下部は直径 0.5m の円形を呈する、2段構造であったと思われる。深さは検出面より上部底面まで 0.42m、検出面より下部底面まで 0.87m。検出時に井戸側は認められない。しかし掘り方の形から井戸側の存在は否定できない。遺物は、須恵器・土師器・瓦器・陶器細片が出土したが焼成可能なものはない。



図 12 井戸 5 検出状況 東から

上部底面まで 0.42m、検出面より下部底面まで 0.87m。検出時に井戸側は認められない。しかし掘り方の形から井戸側の存在は否定できない。遺物は、須恵器・土師器・瓦器・陶器細片が出土したが焼成可能なものはない。

井戸 5

井戸 5 はトレンチ西端部中央に位置する。掘り方の規模は、南北 1.5m、東西 1.3m の隅丸方形を呈する。掘り方のほぼ中央部分には、直径 0.7m をとする円形の井戸側がある。井戸は 2段構造であり、記述に際しての便宜上上段を 2段目、下段を 1段目と呼称する。

多量のわき水と壁面崩壊のため詳細な観察は行えなかったが、1段目は、検出面から下に 0.83m の部分で、方形の掘り形の四隅に角材を打ち込み、周囲に立て固した薄板を丸太の棟で固定する、「継板組隅柱横棟止め」形態の井戸側である。側板としては、厚さ 1cm 前後、幅 20cm 前後、長さ 30~45cm 前後の薄板を使用する。不揃いの形状から転用材と考えられる。棟は直径 15cm 前後の丸太で、部分的にはぞ穴が見られることから、これも転用材と考えられる。1段目井戸側の上部には、掘り形の一辺の中央に、頂点がくるように板材を 3枚づつ重ねて井げたに組み、上部の井戸側を据える板張りのフロアを構築する。板材の1枚はおおよそ厚さ約 5cm、幅 20cm、長さ 50cm の大きさであるが形状は一定しない。不揃いな形状や、部分的に見られる加工の痕跡（今回の構造に全く関係のないぞ穴など）などから、こちらも建築部材などの転用材と考えられる。井桁に組んだフロアの中央部は、上部に載る井戸側の形状に合わせ、円形になるように抉り加工が施される。また、円形の抉りは、上部に取り付く井戸側より一回り小さ



図 13 井戸 5 半裁状況

東から（上）

図 14 井戸 5 下部構造

西から（下）

めに開ける。

2段目は直径0.7m、2段のタガで止めた「縦板組タガ巻き」形態の井戸側である。縦板は幅8~10cmの板材を使用する。上面が削平されており、縦板本来の規模は不明であるが、残存する最長部分で0.78mを測る。

1段目の下部(いわゆる井戸底)からは、井戸枠瓦が多数出土しており、2段目のさらに上部に枠瓦による井桁もしくは井戸鶴が存在したのか(高さ的に困難かもしれないが)、砂層を抜いて作られた井戸の構造から、砂の流入や流失による井戸の崩壊を防止するため、縦板の補強として瓦を用いたものか、下部の断ち割りが不可能であったことから、確認しえなかった。

掘り方内ではその他、西隅に直径約0.25mの不整円形を呈した柱穴が認められた。そのことから、この井戸の上部には上屋もしくは、はねつるべのような構造物が存在したと考えられる。

遺物は上述の枠瓦のほか、土師器や染め付け・緑釉陶器などの陶磁器細片、用途不明な木製品が出土した。

時期は出土遺物から近世以降と考えられる。

土壙1

土壙1は、トレンチ南端部中央に位置する。東西1.3m、南北1mの不整円形を呈し、深さは0.4mであるが、上面が削平されており、検出面が掘り込み面ではないことから本来の規模は不明である。遺物は土師器、須恵器、瓦器を検出したが、いずれも細片であり、固化可能なものはない。

土壙2

土壙2は、トレンチ北部東側に位置する。南北2.8m、東西2mの不整形を呈する。

深さは0.15mであるが上面が削平されており、検出面が掘り込み面ではないことから本来の規模は不明である。

遺物は、須恵器、土師器、瓦器、染め付け、青磁、瓦などが出土した。

溝2

溝2は、トレンチ北側ほぼ中央に位置し、土壙2と溝1との間にある東西溝である。

長さ3m、幅0.7m、深さ0.2mの規模を呈する。遺物は土師器、青磁、伊万里などの細片が出土した。

溝1には切られているが、土壙2との切り合いは明瞭ではなく、前後関係は不明である。

以上第1面の主立った構について見たが、一部の遺構に若干の時期差が見られるものの、出土遺物などから鑑みておおよそ近世以降の時期と考えられる。

第2面

第1面の下層、TP+2.2m付近で、ピット・溝・土壙など多くの遺構を検出した。

溝

この面で検出した溝は、大きく南北方向と東西方向の溝に分けることができる。

トレンチ内を南北に縦断する南北溝の西側に、東西方向の溝はあるが、東側には認められない。このことから、南北溝は、土地の使用区分を区画する区画溝の性格を持っていたと考えられる。

図 15 第2面造構平面図

東西溝

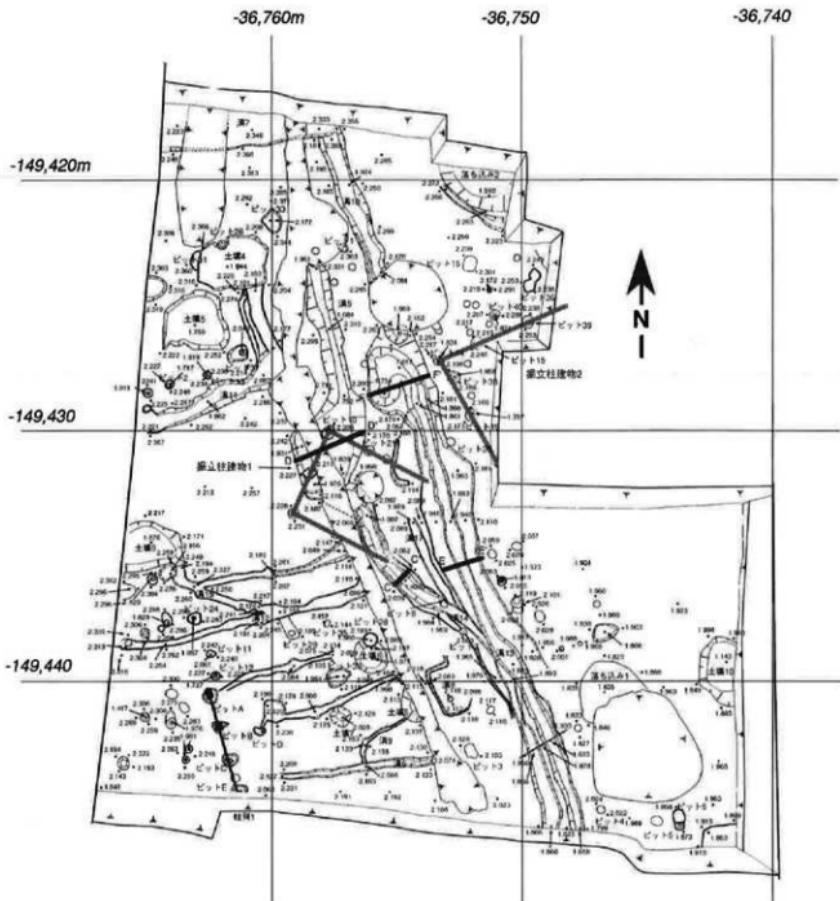




図 16 第2面全景 北から

溝 6

溝6は、トレンチ南端部中央に位置し、座標東に対し、6.5度北へ振る方位をとる東西溝である。

東端部は上位の遺構溝1により切られている。しかし、溝1以東には広がらない。西端部は-36.760m ライン付近で消滅する。したがって本来の規模は不明であるが、検出規模は、長さ 6.5m、幅 0.3m、深さ 0.07m を呈する。遺物は古式土師器(恐らく庄内期)壺底部ほかが細片で出土したが、図化可能なものはない。



図 17 第2面全景 南から

溝 7

溝7は、トレンチ北端部に位置する東西溝である。溝の北辺および、東西両端がトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明であるが、検出規模は長さ 7.2m、幅 1.9m、深さ 0.15m を呈する。

遺物は、弥生土器、古式土師器などの細片が出土した。図化可能なものはない。

溝 12

溝12は、トレンチ西側南よりに位置する東西溝で、座標東に対し 13度北に振る方位をとる。

東端は上位の遺構溝1で切られる。西端部はトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、長さ 10.5m、幅 0.3 ~ 0.6m、深さ 0.05m を呈する。中央部分の北側で溝15が取りつく。遺物は、弥生土器もしくは古式土師器と考えられる細片が出土したが図化可能なものはない。

溝 11

溝11はトレンチ西部中央北よりに位置するL字型の溝である。東西方向の溝は、座標東に対し、23度北へ振る方位をとる。西端部はトレンチ外に広がるため本来の規模は不明であるが、検出規模は、長さ 5m、最大幅 1.0m、深さ 0.3m を呈する。南北方向の溝は2本あるが、ともに北端部を上



図 18 第2面調査風景 北西から
手前から奥に伸びる溝は溝14

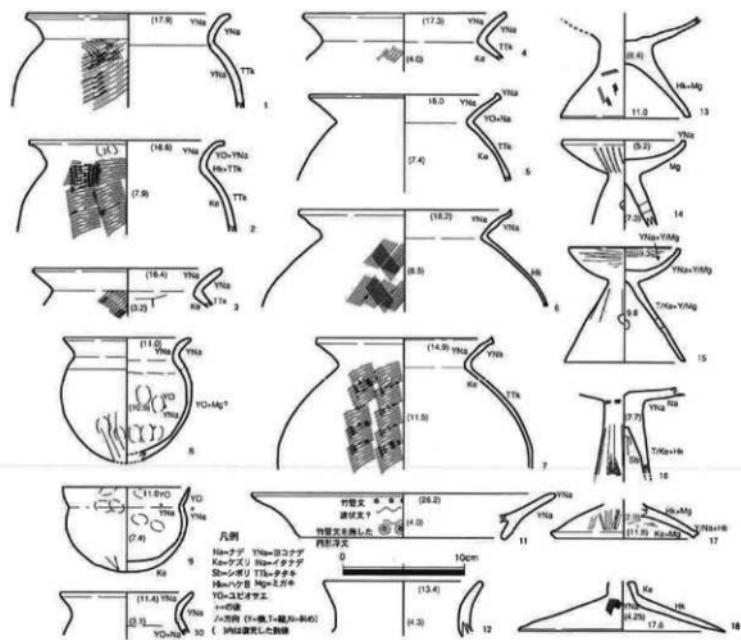


図19 第2面遺構検出中出土遺物実測図

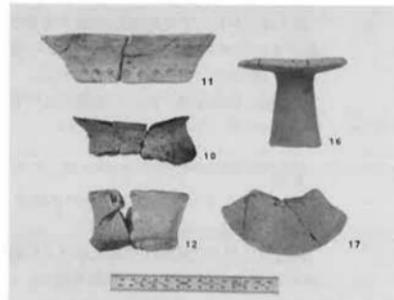
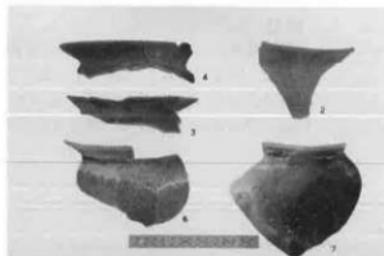


図20 第2面遺構検出中出土遺物



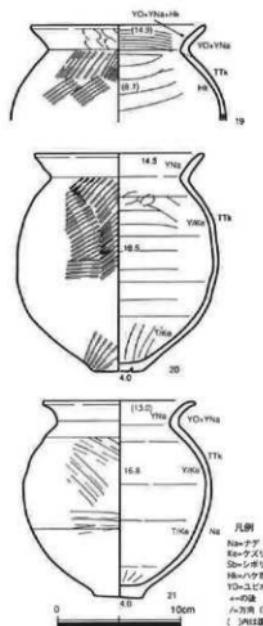


図 21 溝 15 出土遺物（右）
図 22 溝 15 出土遺物実測図（左）

図 23 溝 10 水灌部遺物出土状況 南から



壌1に切られているため、本来の規模は不明である。検出規模は、東側の溝で長さ3m、幅0.6m、深さ0.1mを、西側の溝で長さ3m、幅0.22m、深さ0.1mを呈する。遺物は古式土師器壺・小型壺の細片が出土したが、同化可能なものはない。

溝 15

溝15は、トレンチ西部南よりに位置し、溝12の中央部分に取りつく北西・南東方向の溝である。

北端部は、土壤9で切られており本来の規模は不明である。検出規模は、長さ4m、幅0.34m、深さ0.05mを呈し、座標東に対し20度南に振る方位をとる。遺物は完形に復元可能な古式土師器壺3個体をはじめ、体部にタタキの後ハケ目調整を施す壺体部など細片が多く出土した。(図21・22)

溝 9

溝9は、トレンチの中央南端部、溝6の北側に位置するJ字型の溝である。東西溝部分東端は、土壤6に切られ、西端部は南に方向を変え溝6に切られることから、本来の規模は不明である。検出規模は、東西溝部分は長さ約2m、幅0.15m、深さ0.03m、南北溝部分は長さ0.8m、幅0.2m、深さ0.03mを呈する。東西溝部分は座標東に対し27度北にふる方位をとり、西端部は緩やかに南下し略南北の方位をとる。

遺物は弥生土器もしくは古式土師器と考えられる細片が出土したが、同化可

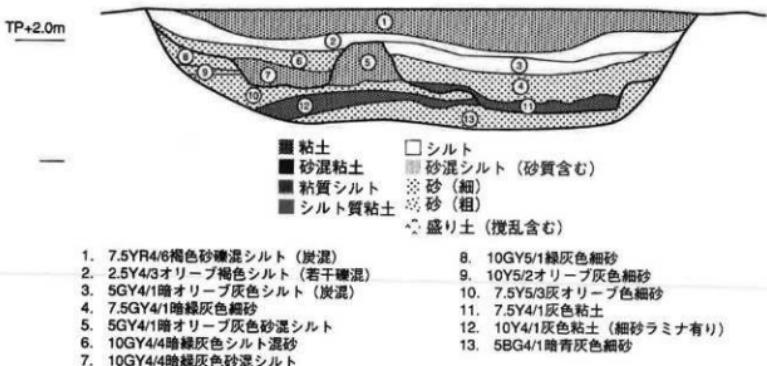


図24 溝10水溜部分断面図

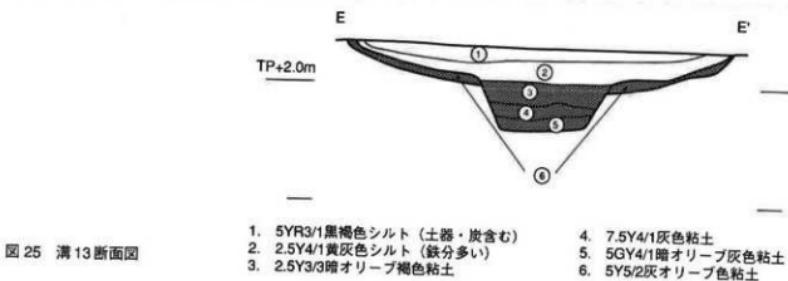


図25 溝13断面図

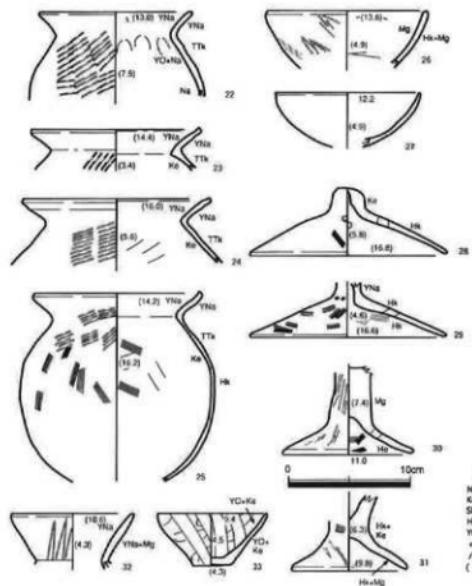
能なものはない。

南北溝

講10

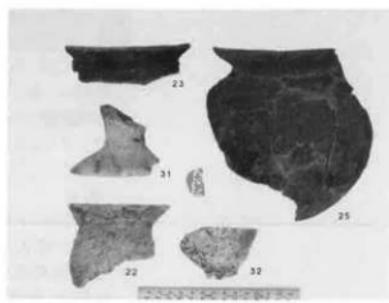
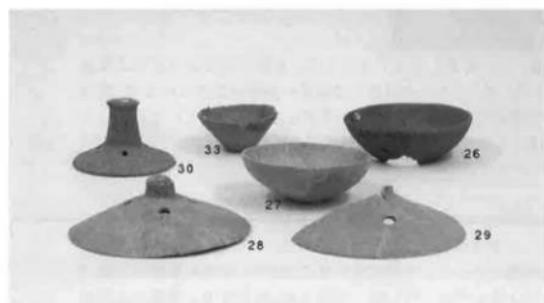
溝10は、当初搅乱に南端部分が切られていたため、単独の遺構との認識で調査を行った。しかし、調査の進展に伴って、搅乱を挟んで南に伸びる溝13および水溜部と同一の遺構であることがわかった。ここでは、搅乱以北の部分と水溜部について記載する。

トレンチの北端部中央に位置する南北溝で、座標北に対し、21度西に振る方



凡例
Na=ナデ YNa=ヨコナデ
Ke=ケズリ TTx=ティタナ
Sh=シラフ Hs=ハクモ Mg=ミガキ
Yo=ヨボサエ イの後
/=方舟 (Y=横 T=縦 N=斜め)
()内は復元した部屋

図 26 溝 10 出土遺物実測図



位をとる。

北端部はトレーンチ外へ広がるため本来の規模は不明であるが、検出規模は、擾乱までの部分で長さ 6.3m、幅 0.9m、深さ 0.25m を呈する。溝 13 と合わせると検出全長は約 30m になる。

溝の南端部(擾乱のすぐ南)には、西側に若干張り出した歪な橢円形を呈する水溜部がある。水溜部の規模は長軸約 3.3m、短軸 2.5m、深さ 0.45m。

遺物は、溝から古式土器器の壺の他、サヌカイトフレーク、砥石などが出土したが、水溜部からは直口壺(32)・てづくりね土器の鉢(33)・壺(22・25)・

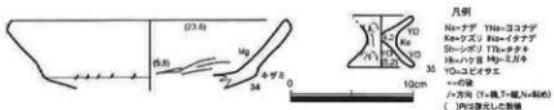


図 28 溝 13 出土遺物実測図（左）

図 29 溝 13 出土遺物（右）

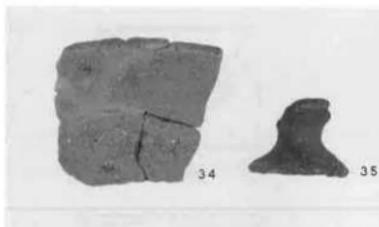
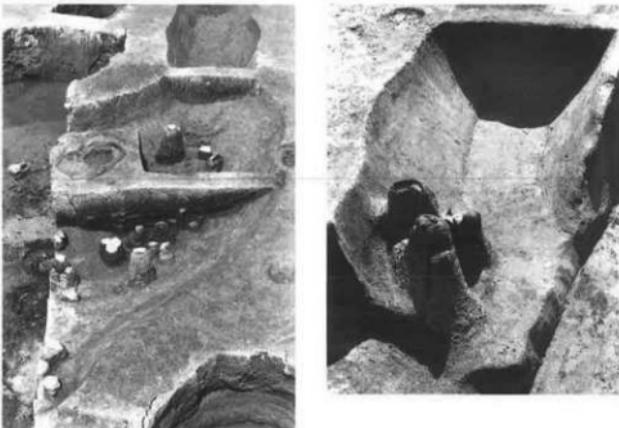


図 30 溝 5 水溜部遺物出土状況

南から（左）

図 31 溝 5 遺物出土状況

北から（右）



高壙（26・28・30・31）がまとめて出土した。遺物の特徴から布留式早葉のものと考えられる。また、この水溜部には浚渫の形跡が認められるが、調査時浚渫について意識しておらず、遺物を分別して取り上げていない。したがってここに挙げたものは、上位下位の区別はない。

溝 13

溝 13 は、トレンチ中央や東よりに位置し、トレンチを縦断する南北溝で、溝 10 が荒乱によって南北に分断された南側である。

溝の規模は、南端部分がトレンチ外に広がることから、本来の規模は不明であるが、検出規模は長さ 21m、幅 1.6m、深さ 0.4m を呈する。平面および断面観察からこの溝は水溜部とともに浚渫されたことがわかる。特に、水溜部分から溝 14 と切合うまでの約 10m の間の浚渫は顕著である。浚渫の内容は、先行して掘削された約 1.6m の溝の内側に、幅 1.55m の溝を約 0.12m 掘削し、中央部分は上端幅 0.55m、下端幅 0.35m、深さ約 0.35m の逆台形に掘削する。

-149,440m ライン北側で溝 14 を削る。しかし、浚渫前の溝は 14 によって切られていることから、溝 13 浚渫前 - 溝 14 - 溝 13 浚渫後という関係が成り立つ。

溝自体から出土した遺物は多くない。中でも図化可能なものは少なく、高壙・ミニチュアの器台が出土した。（図 28・29）

図 32 溝5水灌部断面図

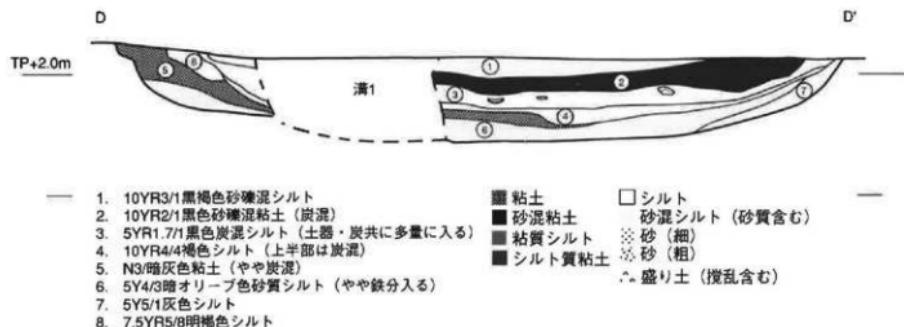


図 33 溝5断面図

図 34 溝5出土遺物実測図



凡例
Na=ナマ YNa=ヨコナマ
Ke=ケヌリ YNa=イナマ
Sh=シギリ TT=タタキ
Ha=ハカリ Mg=ミガキ
Mo=モリタク
ト=トゲ
ノ=ノコ
（）=内寸 (Y=幅 T=高 H=斜)

() 内は復元した数値

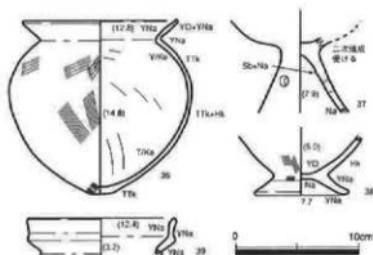


図 35 溝5出土遺物 その1

図 36 溝5出土遺物 砥石



また、溝14との切合う部分も、それぞれ分けることなく、一括して遺物を取り上げたため、どちらの溝に帰属するかは不明であるが、広口壺・高壺・器台（図42・43）が出土した。

図37 溝5水溜部出土遺物
実測図

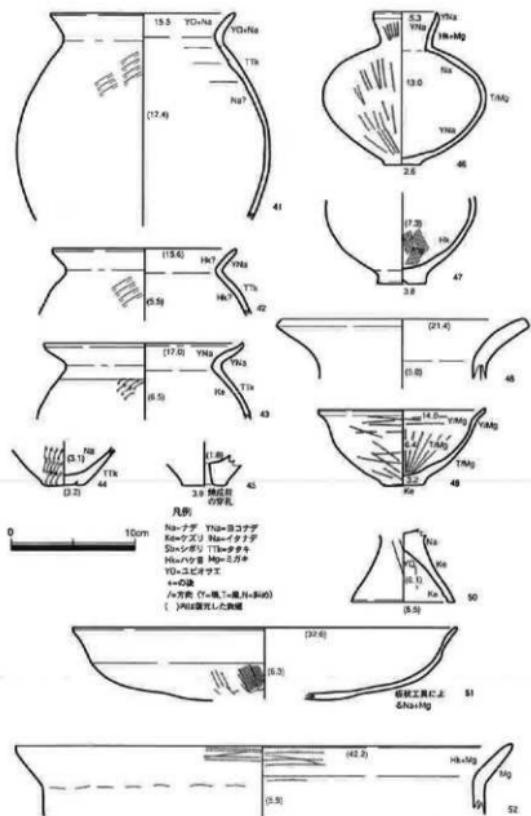


図38 溝5水溜部出土遺物
その1

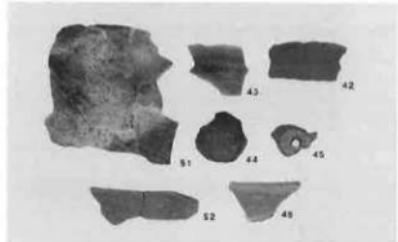


図39 溝5水溜部出土遺物 その2

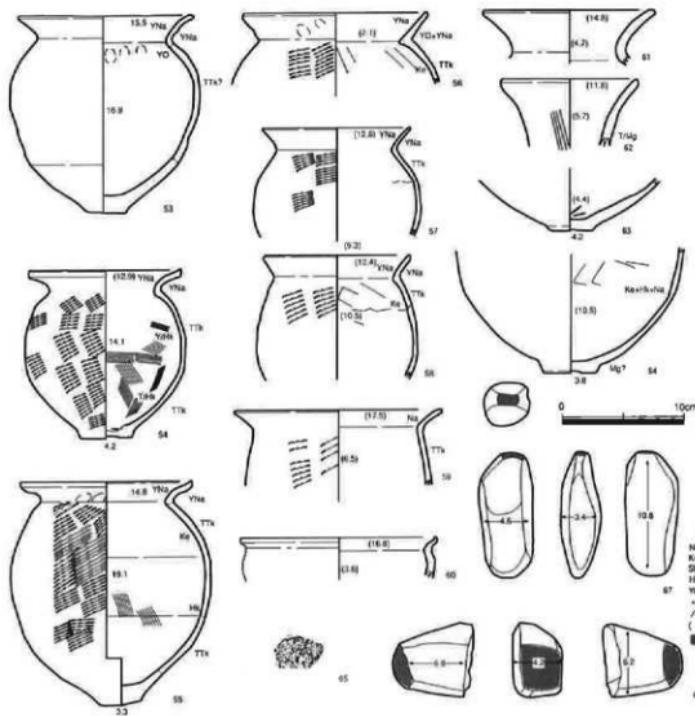


図 40 满14出土遺物実測図

図 41 满14出土遺物

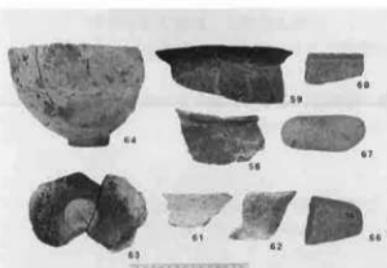


図 42 满13・14出土遺物



図 43 满13・14出土遺物実測図

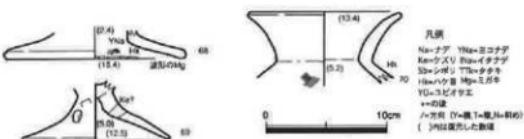
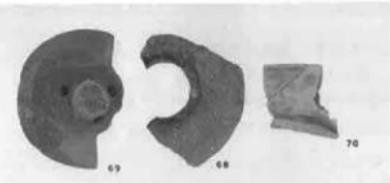




図 44 溝 14 断面図



図 45 溝 14 遺物出土状況 南から



図 46 溝 14 出土遺物近景 南東から

この溝は、トレーナー中央や
や北よりで、溝 10 の西側を
並走し、いびつな方形を呈
した水溜部を有する南北溝

である。この溝も、水溜部南端部分を後世の遺構によって掘り割られ、調査
当時は、単独の遺構として検出・調査した。しかし、調査の進展にともなって、
溝 14 と連続することが判明し、本来的には、両者が一つの遺構であった
と考えられる。ここでは、それぞれ個々に記載する。

溝部分の北側は、後世の遺構（溝 1）に削られ、本来の規模は不明である。
検出規模は、長さ 5m、幅 0.9m、深さ 0.6m で、溝断面は逆台形を呈する。南
端部は水溜部との間に切合せ関係ではなく、一連のものと考えられる。

遺物は、溝内の堆積土中より、甕・複合口縁を有する甕・高壺・台付き鉢・
砂岩製砥石が出土した（図 34～36）。図示した甕（36）の体部・口縁端部の
形状は布留傾向甕もしくは甕 C といわれるものの特徴を有していることなど
から、庄内期中～晩葉ごろと考えられる。

水溜部は、溝 5 の南端に北東隅で取りつく。西側は矩形を、東側は弧状を呈
する。中央西よりを後世の溝（溝 1）が縱断するが、南北 3m、東西 2.9m、深
さ 0.45m の規模を呈する。

遺物は、甕・高壺・鉢・器台・広口甕・短頸直口甕等が、溝 5 との取り付け
部のすぐ南あたりにかたまって出土した。（図 37～39）

溝 14

この溝は、溝 13 の西側にやや蛇行しながら並走する南北溝である。溝 5 の
南側にある水溜部の南東端に合流する。また、溝中央部分は、溝 13 によって
削られる。

溝の北側は、両岸に犬走りを設けた 2 段掘りであるが、南半部は犬走りを設
けない。

南端部分は、トレーナーの外側に広がるため本来の規模は不明であるが、水溜
部の南端からは、長さ 17m、幅 0.85m、深さ 0.2m の規模を呈する。

遺物は、実測可能な中型および小型の甕が 7 個体・甕底部・ミニチュア器台・
線刻土器の他、ハンマーストーン、蛤刃石斧の尾部など出土した。（図 40～41）

溝8

この溝は、トレンチ南部中央、溝14の西側に位置し、口を東に開いた逆「コ」の字型を呈する。

北部は、東端部分で北に約90度曲がるが、途中で消滅する。南部も東端部分で消滅し、他の遺構に取りつかない。したがって、本来の規模は不明であるが、検出した全長は3.8m、幅0.18m、深さ0.05mを呈する。

遺物は弥生土器もしくは古式土師器と考えられる細片、サヌカイトフレークが出土したが、図化可能なものはない。

溝17

この溝は、トレンチのほぼ中央、溝14と溝13の間に位置する南北溝である。北端部は途中で消滅しており、南端部は溝14で切られる。したがって本来の規模は不明であるが、検出規模は、長さ4m、幅0.4m、深さ0.06mを呈する。

遺物は、弥生土器もしくは古式土師器と考えられる壺・高環が出土したが、細片のため時期などの詳細不明、図化可能なものはない。

土壙4

第2面では多くの土壙を検出した。そのうちいくつかについては、井戸の可能性があるが、調査当時はすべて土壙として調査を行っていることから、ここでの記載はその時の名称にしたがった。

土壙4

上壙4は、トレンチの北西、溝11南北溝部分の北端部に位置する。東西2.8m、南北2.1mの不整長方形を呈し、深さは0.4m。遺物は、古式土師器壺・壺・鉢が出土したが、図化可能なものはない。

土壙5

上壙5は、トレンチの北西、土壙4の南西に位置する。東西2.5m、南北2.4mの不整形を呈する。

深さは0.4m。遺物は、古式土師器壺・小壺が細片で出土した。図化可能なものはない。

土壙6

上壙6は、トレンチ中央南側に位置する。東半分を後世の遺構溝1によって削られ、本来の規模は不明であるが、検出した規模から、直徑約1.5mの不整円形を呈すると考えられる。深さは0.3m。南西の部分で溝9を削る。

遺物は、古式土師器複合口縁の壺もしくは高環(77)・壺が出土した。(図69・70)

土壙7

上壙7は、トレンチ中央南側で土壙6の西側に位置する。東西0.8m、南北0.7mの隅丸長方形を呈する。深さは0.1m。遺物は古式土師器が細片で出土した。図化可能なものはない。



図 47 土壌9遺物出土状況
南から

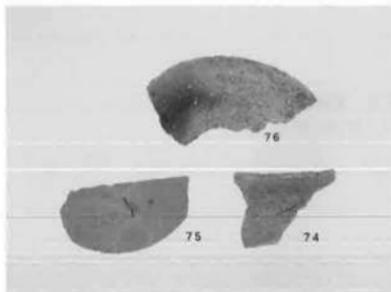
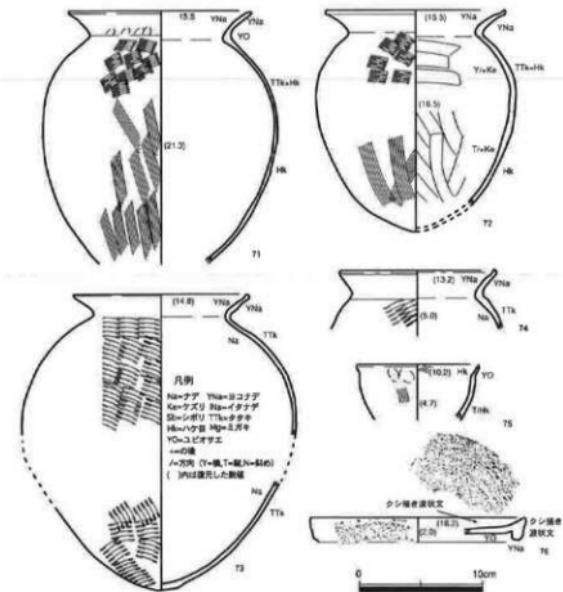


図 49 土壌9出土遺物

土壤8

土壤8は、トレンチ中央南側で土壤6の北西に位置する。長軸1.4m、短軸1.2mのいびつな楕円形を呈する。深さは0.12m。北側をピット28に切られる。遺物は、弥生土器もしくは古式土器が細片で出土した。図化可能なものはない。

土壤9

土壤9は、トレンチ中央西端部分に位置する。西側約1/3がトレンチ外に広がるため本来の規模は不明であるが、検出規模は東西2.3m、南北2mのいびつな長方形を呈する。深さは12m。南東隅の部分で溝15を削る。

遺物は、遺構の底部からほぼ完形に復元可能な甕3個体を含め、壺・高杯・低脚高杯・小型丸底甕など多量に出土した。中でも甕は、布留式早葉～中葉の特徴を有しており、この土壤の埋没時期はそれ以降と考えられる（図47～49）。

土壤10

土壤10は、トレンチ東端南よりに位置する。東側がトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明であるが、検出した規模から、南北2.7m、東西2.2mの不整円形を呈すると考えられる。深さは1.1m。

土壤10は概ね粘土層で埋没しているが、その堆積状況や遺物の出土状況から、大きく5回に分かれて埋没したと考えられる。以下に復元した埋没過程を記載する。

まず、ほとんど遺物を含まないシルト質粘土層（15層）が堆積した後、完形に復元できる甕を含む暗灰白色粘土層（13層）が堆積する。甕は、胴部で上下2つに分かれており、口縁部を上に底部を下にしたいわゆる正位置に出土した。しかし、底部が口縁部側より北へ約0.25m移動した位置にある。断面図



図50 土壤10を含むトレンチ東壁断面図

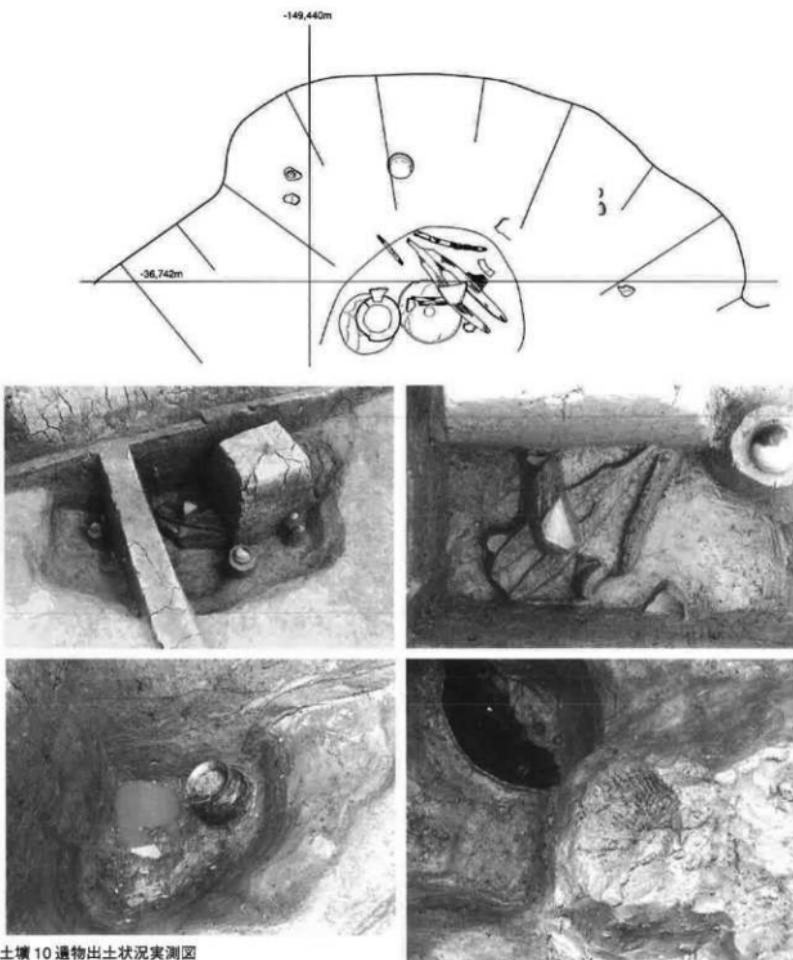


図 51 土壌 10 遺物出土状況実測図
(上)

図 52 土壌 10 上層遺物出土状況
西から (中央左)

図 53 土壌 10 上層ナスビ形木製品
出土状況 北から (中央右)

図 54 土壌 10 下層甕出土状況
西から (下左)

図 55 土壌 10 中位植物纖維製縄み物
出土状況 北から (下右)

からは堆積土の流入方向が、南側からであることがわかるが、正位置に据えた土器を胴部からきれいに割り取り、その上半部だけを25cmも一気に動かすような激しい流入の痕跡は認められない。また堆積途上にかかる土圧でも、移動の幅が大きすぎる。したがって泥のたまつた部分に、当初から半裁した土器の下半分と上半分は、検出した位置程ではないが、ずれた位置に置かれたものと考えられる。

統いて甕が泥で覆われた後、暗緑灰色の粘土層(11層)が植物纖維を編み込

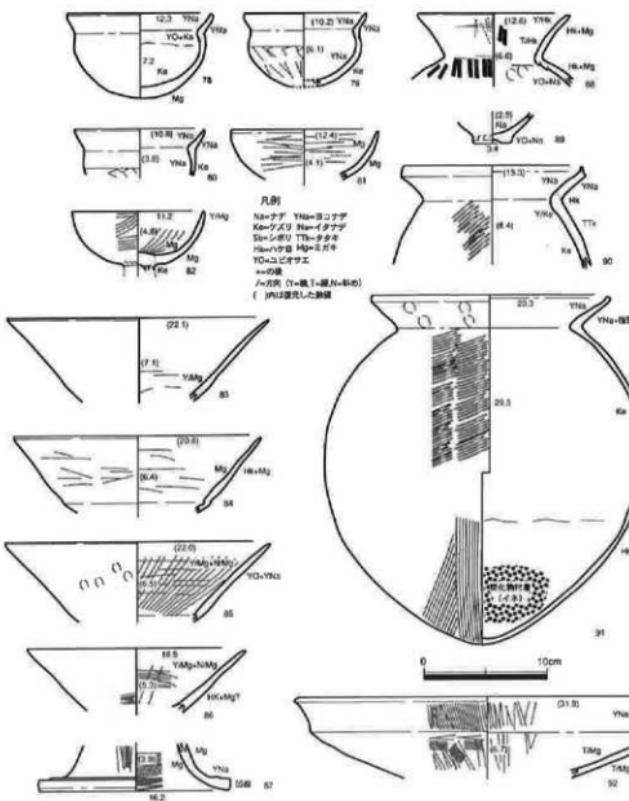


図 56 土壌 10 出土遺物
実測図

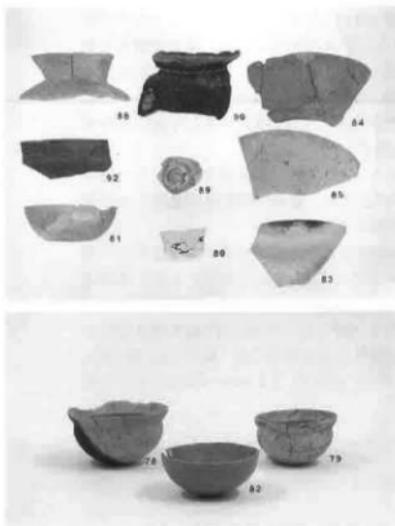


図 57 土壌 10 出土遺物

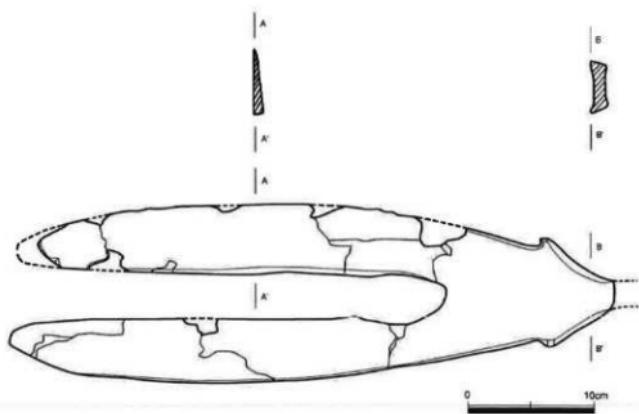


図 58 土壌10出土ナスピ型木製品
実測図（上）

図 59 土壌10出土ナスピ型木製品
(下)



んだ籠状の遺物を含んで堆積する。

その後、暗オリーブ灰色のシルト層（10層）が堆積するが、その土層中にナスピ形木製品（図58・59）が含まれる。ナスピ形木製品は、腐食が著しく取り上げに際して破損したが、先端は折れて欠損しているものの着柄部附近が最も残りがよい。加工痕は不明瞭であるが、ハツリの痕跡が一部残る。ナスピ形木製品に東側には、棒状の木質遺物が出土したが、腐食が著しく加工痕跡を認められなかったことから、今回は削愛した。

ナスピ形木製品が埋没後、暗褐色シルト層（8層）が堆積するが、その層中には、小型丸底壺の他、高坏・甕が含まれる。最後に暗褐色の粘質シルト層（7層）によってこの土壌は充填され埋没する。

これらのことから、各層に含まれる遺物は、その層が堆積するまでの間に投棄されたもので、一括性が高いと考えられ、下位の遺物と上位の遺物との間に若干の時期差があるものと考えられる。しかし、残念ながら、現場での制約上、完全な各層位ごとの遺物の取り上げは行っておらず、編み物を挟んだ上下の位置関係が明らかな遺物は、8層内小型丸底壺（78）・高坏（83）甕（89）、10層内ナスピ形木製品と13層内甕（91）である。（文章中の層位の番号は図50参照）

図 60 挖立柱建物 1 検出状況 東から
人の立っている所が柱列



図 61 挖立柱建物 2 検出状況 東から



ピット

この面では、多数のピットを検出した。調査において、柱当たりが認められ、柱穴と考えられるものや、杭穴・単に掘りくぼめた穴など土壙より規模の小さいものを、ここでは全てピットとした。

ピットは全体的に、時期を決めうる遺物を含むものが少なく、遺構単体の時期を決めるには困難であるが、一部を除くそのほとんどがこれまで記載してきた溝や土壙を切って掘削されており、時期的にそれらの遺構より後出のものであることがわかる。

いくつかのピットが組み合って、建物や杭列を構成するものもある。しかし、後世の遺構による搅乱や、削平によってすでに存在しないピットもあると考えられ、完全な形の建物に復元できたものはない。

紙数の関係で、全てについて記載できないことから、建物などを構成するものの他、主だったピットについて述べる。

掘立柱建物 1

掘立柱建物 1 は、トレンチ中央部に位置し、ピット 10・21 を含む。遺構の切りい関係から、溝 5 の水溜部埋没後に作られたものである。

南北 2 間、東西 1 間以上の規模を呈する建物である。柱間は、芯芯で約 1.8m を測る。

ピット 10 から南西に連続するピットを結んだ方位は、座標北に対し 24 度東に傾く方位をとる。

柱穴は、南北 0.45m、東西 0.65m のいびつな隅丸長方形～方形を呈し、検出した柱当りから復元できる柱の規模は、直徑約 0.3m 以内と考えられる。遺物は弥生土器細片が出土した。圓化可能なものはなく、遺物だけから遺構の時期を決めるのは困難である。

掘立柱建物 2

掘立柱建物 2 は、トレンチ北部東端中央よりに位置する。南東部分はトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明である。検出規模は、南北 1 間、東西 2 間を呈し、柱間は芯芯で 1.6m。座標北に対し、32 度西に掘る方位をとる。柱掘方は、1 辺約 0.5m の隅丸方形を呈する。また検出した柱当りから復元した柱の規模は、直徑 0.2m 以内と考えられる。遺物は弥生土器細片が出土したが、圓化可能なものはなく、他の遺構との切り合いもないことから、時期の決定は困難である。前述の掘立柱建物 1 とは、方位および規模が違うため、同一時期のものではないと考えられる。

柱列（図 64）

柱列 1 は、トレンチ南西に位置する。検出したのは 3 間分で、4 つのピットからなる。最南部のピット E の半分はトレンチ外に広がるため、この柱列が南方に延びる可能性は残されている。北端部のピット A 以北には連続すると考えられるピットは見当たらぬ。



図 62 柱列 1 検出状況 北西から（上）

図 63 柱穴内礎板出土状況 西から
左手前がピット C、右奥がピット E（下）

図 64 柱列 1 平・断面図

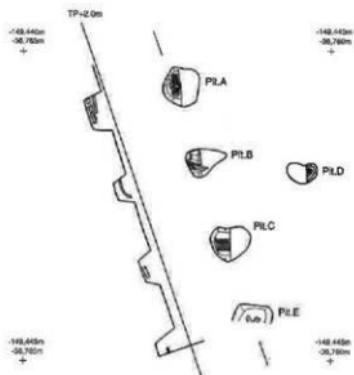


図 65 柱列出土櫛板実測図

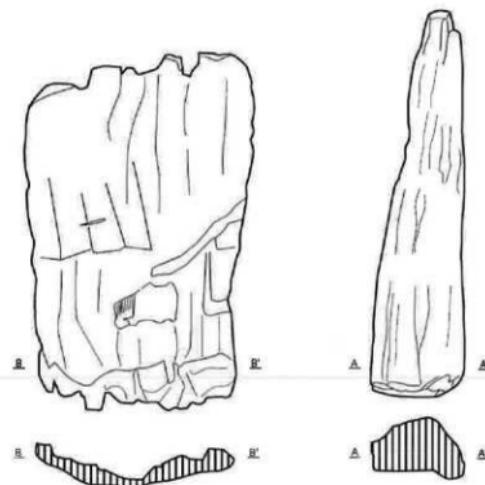
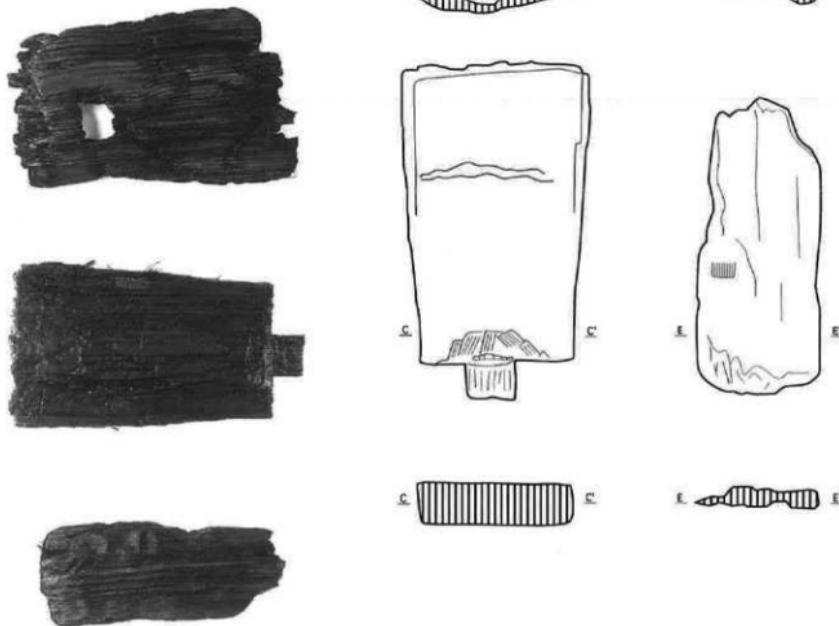


図 66 柱列出土櫛板（上から B・C・E）



い。この柱列を構成するピットには、特徴としてそれぞれに礎板（図65・66）が入る。今回の調査において、多くのピットを検出したが、礎板や礎石など、柱の沈降を防止する構造を持つピットは、これら4つ以外には認められない。

柱は、東西南北ともに0.6mの隅丸方形ないしは不整形を呈し、柱間は1.4m。深さは、上面が削平されており、本来の深さは不明であるが、ピットA・B・Cは約0.3m、ピットEは0.5m。礎板の位置はピットEではTP+1.684mとやや深いが、ピットA～CはTP+1.771～1.717mと平均した位置に据えられている。

礎板に使用されている木は、いずれも板材で、中央に方形の穴を穿ったものや、羽子板状などが認められることから、転用材と考えられる。また礎板の他に遺物はなく、明確な時期の判断はできない。

落ち込み1

トレンチ南東部中央で溝13の東に位置する。試掘壙に南東部を削られるため、本来の規模は不明であるが、検出した規模から、東西2.8m、南北4.3mの不整形を呈すると考えられる。深さは0.25m。遺物は、甕(94)と複合口縁の壺(95)が出土した（図69・70）。

落ち込み2

トレンチ北東隅に位置する。全体の3/4がトレンチ外に広がるため、本来の規模は不明であるが、検出規模から、直径4.9mの不整円形を呈するものと考えられる。深さは0.3m。遺物は弥生土器もしくは古式土師器が出土したが、図化可能なものはない。

井戸7

井戸7は、井戸8とともに落ち込み1の東に隣接して位置するが、層位的に落ち込み1より下位に存在しており、落ち込み1周辺を少し下げたところで検出した。直径約1.4mのはば円形を呈し、深さは上部が削平されているため本来の規模は不明であるが検出規模で0.4mを呈する素掘りの井戸である。

検出面より約0.2m下がったところまでは、皿状に掘り下げ、以下一回り小さい径で垂直に掘り下げる。遺構内の堆積土の観察からは、層状の堆積は認められず、ブロック土などが見られる事から、一気に埋められたことが解る。遺物は、弥生土器もしくは古式土師器と考えられる土器細片が出土したが、図化可能なものはない。

井戸8

井戸8は、井戸7の北に隣接し、直径約1mのはば円形を呈する。井戸7同様上部は削平されていることから本来の規模は不明であるが、検出規模は深さ0.6mを呈する素掘りの井戸である。

遺構内の堆積土の観察からは、井戸7同様自然堆積ではなく、人為的な堆積が認められる。遺物の出土はない。

その他、第2面のベースを掘削中に検出した遺物で、図化可能な

図67 落ち込み2検出状況 南から



図68 井戸7・8検出状況 東から

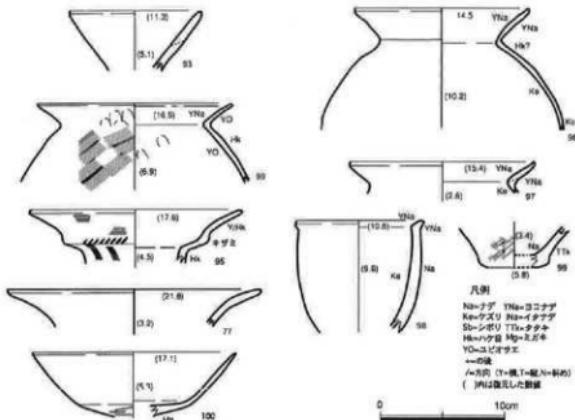
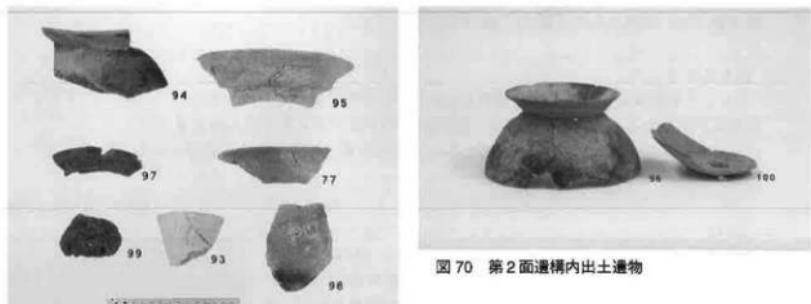


図69 第2面邊構内出土遺物実測図
ピット6(93)・ピット33(96)・
ピット19(97)・ピット8(98)・
ピット31(99)・ピット18(100)
落ち込み1(94, 95)・土壌6(77)



ものについて挙げた。(図71・72)

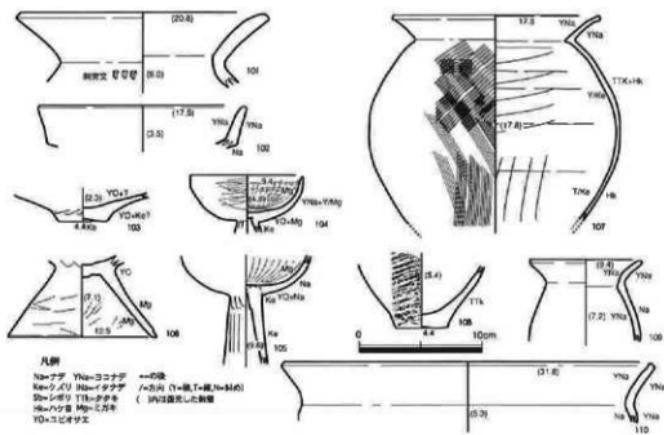


図 72 第2面下層出土遺物

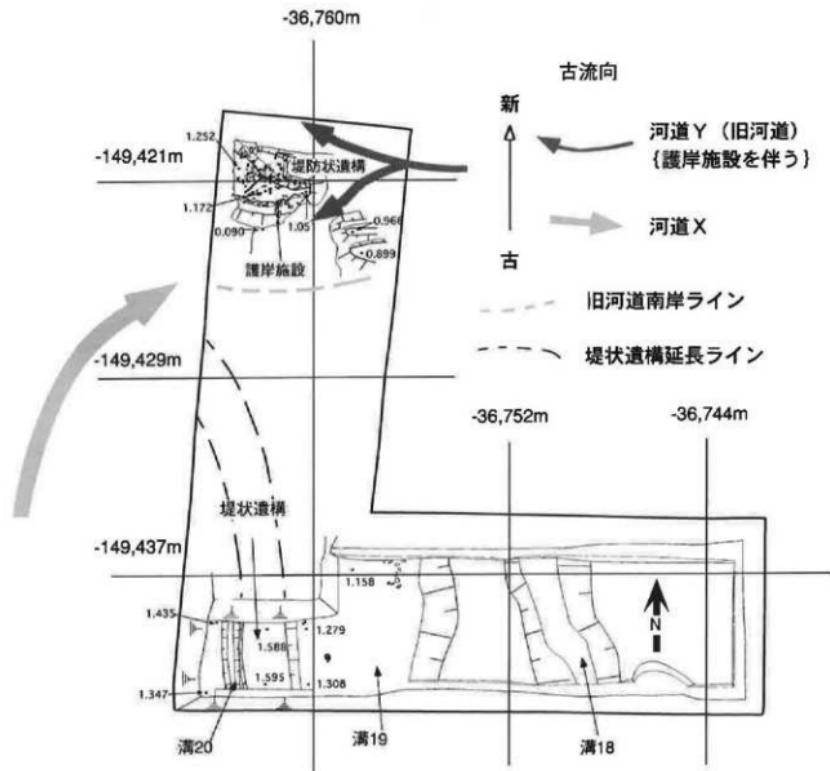
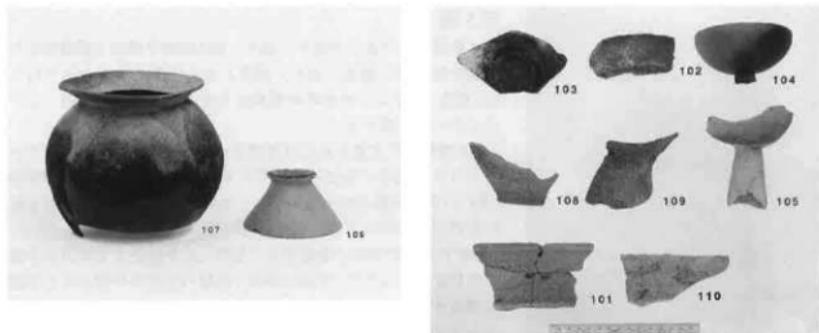


図 73 第3面遺構平面図



図 74 第3面南北トレンチ全景 一緒に掘削してしまった。したがってこの部分については3面を平面で検出していない。

第3面

「II章調査の方法」で述べた通り、第2面終了後は2期調査として調査地西面・南面に接して設置したL字型のトレンチを行った。便宜上、トレンチをその形状から南北トレンチと東西トレンチに分けて記載する。

発掘調査前に実施された試掘調査では、位置的にちょうど東西トレンチの部分にあたっていたため、第2面の下位には層厚約0.5mのシルト層と粘土層からなる遺物包含層があり、その下位に最終遺構面があると考えられていた。

南北トレンチでは、北端部分で層厚1mを越える大規模な砂層の堆積が認められた。工期の関係上砂層の広がりや深さなど詳細に検討する余裕がなく、その下位にあると思われる遺構面めざして一気に重機を用いてその砂層を除去することになった。北端部分では、砂層の中位で人間の足跡痕跡や加工木材を使用した構築物の痕跡を検出したため、それ以下の部分は人力による鋤削に切り替えた。しかし中央部から南部にかけての部分は、本来3面として認識されるはずの、黒色粘土層を含むシルト・粘土層を、河道堆積物にみられる間層とした過った認識によって下位の砂層と

南北トレンチ

旧河道（河道Y）

南北トレンチの北端部で大規模な自然河川を検出した。

河道は南岸が、トレンチの北端部分を北東から南西にかけて斜めに横切ることから、全長や幅員といった本来の規模は不明である。トレンチ北端の東西断面で河道南岸を認めることができたことから、幅員は7mを越える規模を呈すると考えられる。また深さは1mを越える。堆積層の観察では、この河道が埋没するまでの間には、微妙に流向を替えた砂層が数度流入したことがわかった。そしてその埋没過程の中に人間が作った堤防状遺構の一部を検出した。

図73には、古流向を記号で記し、下位の河道Xを含めた埋没状況の復元をおこなった。復元の解説は「VI章まとめ」を参照頂きたい。

堤防状遺構は、河道南岸部分付近で検出した。砂層の上部に、粘土からシルト質の土で盛り土を行う。盛り土は最も高い部分で約0.4m。幅は約3m、長さは中央部分で分断されているが、8m以上を呈すると考えられる。

分断された高まりの西側、上部平坦面から前面にかけて、多数の人間の足跡とともに護岸施設と考えられる杭と木材を組み合わせた構造物を検出した。

護岸施設は、南の斜面に、約5cm角で長さ1mの杭を數本打ち込み、それを止める施設として、上部平坦面にH字状に木材を組む。その上面には、砂混じりの粘土からシルト層を張り付けるが、作業途中で大水にあったのか、上面には無数の足跡が残る。

また後述するように、砂層内からは、扁平片刃石斧もしくは、鍛造板状鉄斧を装着し、横斧として使用したと考えられる手斧の柄を検出した(図84・85)。斧の刃の部分は、今回検出していないため、この工具が護岸施設設置に際して、使用されたものかは不明である。

図 75 旧河道護岸施設上面実測図

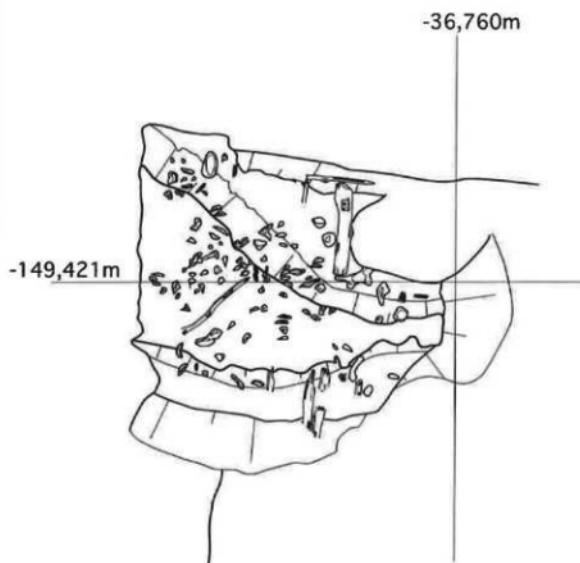


図 76 旧河道護岸施設上面調査風景
南から



図 77 旧河道護岸施設検出状況
南西から（左）



図 78 旧河道護岸施設の南面を
正面から見たところ（右）

この施設に使用された木材は、施設設置に関係のない部分に、ほぞ穴が開けられていることから、他の建築部材の転用と考えられる。

旧河道の堆積層は主に砂層で、層厚約1.5mを呈し、粘土やシルト層が間層として入る。この砂層内からは、弥生時代中期から後期の特徴を有する甕・高壺・壺・鉢などの多くの土器や、手斧の柄などの木質遺物が出土した（図79～81・84・85）。

出土した土器には、比較的幅広い時期差が認められるが、弥生時代後期の特徴を持つものが圧倒的に多いこと、庄内式以降の特徴を有する土器が含まれないことなどから、この河道はおおよそ弥生時代後期以降で古墳時代直前の時期に埋没したものと考えられる。

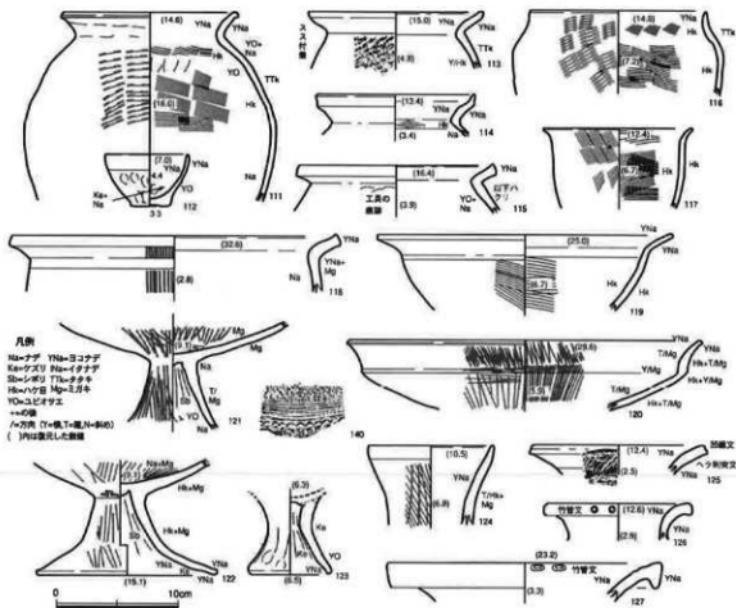


図 79 旧河道出土遺物実測図

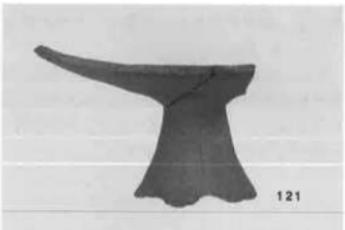
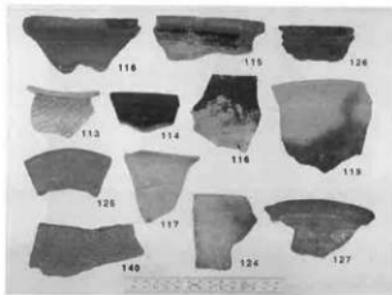


図 80 旧河道出土遺物その1

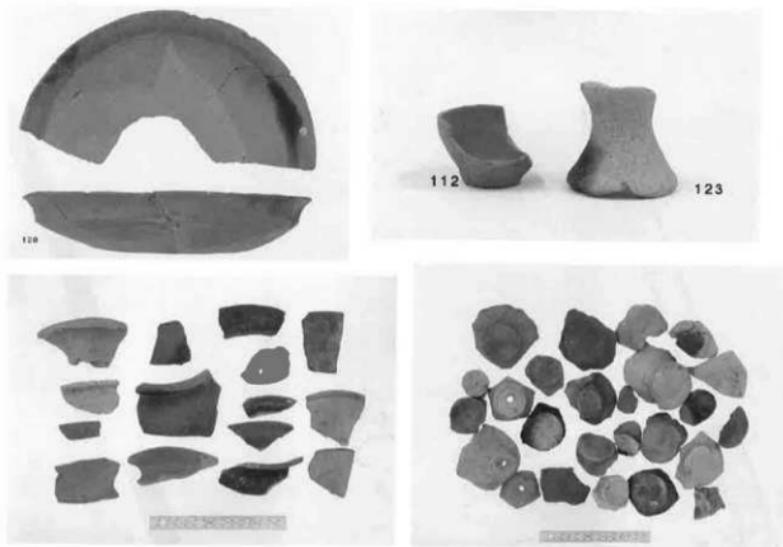


図 81 旧河道出土遺物その2

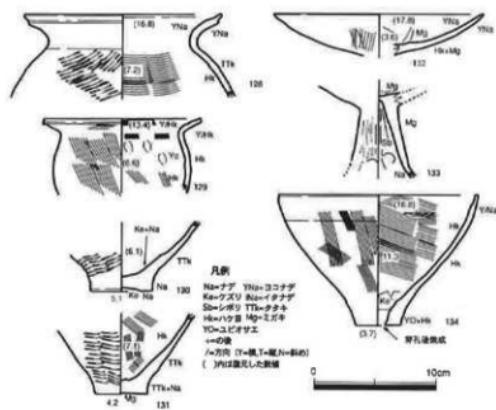


図 82 河道X出土遺物実測図

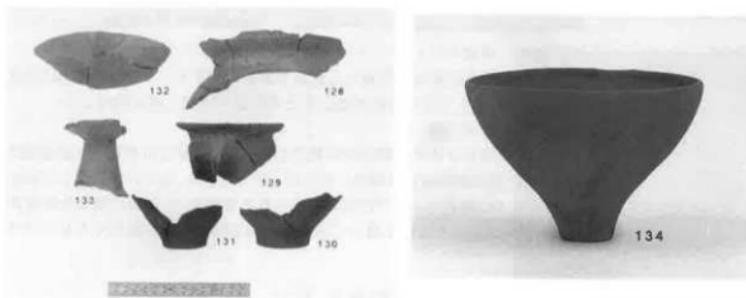


図 83 河道X出土遺物

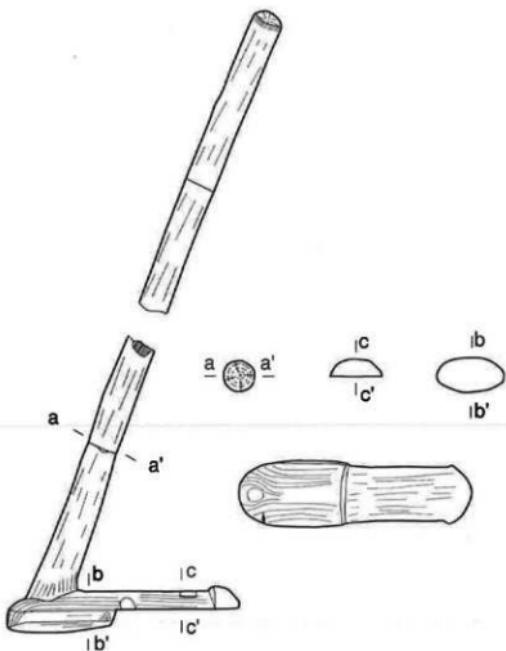


図 84 旧河道出土手斧実測図



図 85 旧河道出土手斧

図 86 東西トレンチ西端部
中央の高まりが堤状造構
左側が溝 20 南から



東西トレンチ

調査区の南辺に面して設定された東西トレンチは、西の端に堤状を呈した南北方向の高まりとその東西両側に溝を検出した。

堤状造構

トレントの西端部分で検出した、人的な高まりである。北部は前述の理由により掘削してしまったことから、面的に検出はしていない。南北トレント西壁に認められる痕跡から、北部は緩やかに北西方向にカーブを描いており、-149,429m ライン附近でトレントの



図 87 堤状造構と溝 20 西から

図 88 堤状造構断ち割り
北断面



図 89 溝20から堤状造構断ち割り
北断面

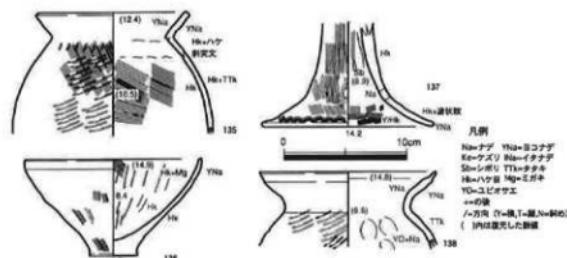
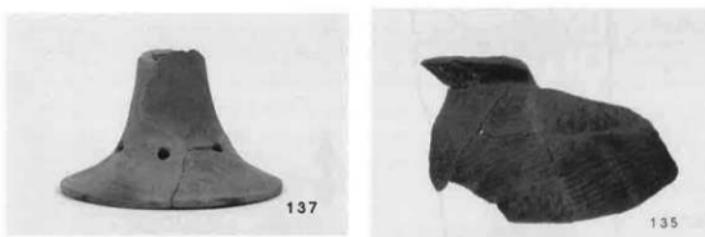


図 90 第3面出土遺物実測図



西外方に広がることがわかる。南部はトレーナー外に広がることから、本来の規模は不明である。面的に検出した規模は、南北4m、高まり上部の東西2mを呈する。西壁に見られる痕跡を繋ぐと全長14mを越える。

トレーナーの西外方に流芯を持つ下位の河道Xが、埋没した際に形成された自然堤防の高まりを利用して、0.3mの盛り土を行いベース面より0.6mの高さにする。

譜 20

譜 20 は、堤状造構の西側の落ち際に並行してある南北溝である。溝の南北端は、高まりと同様重機によって掘削したため本来の規模は不明であるが、検出規模は長さ4m、幅0.8m、深さ0.1mを呈する。遺物は、弥生時代後期の特徴を有する甕が出土した。(図 90)

図 91 第3面出土遺物

図 90 の説明文を参考して、各断面の層構造と出土物を示す。

溝 18

溝 18 は、東西トレンチ中央部西よりに位置する南北溝である。座標北に対して 17 度西にふる方位をとる。

溝 18 同様両端部がトレンチ外に広がることから、本来の規模は不明である。検出規模は、幅 3m、長さ 6m、深さ 0.5m を呈する。遺物の出土はない。

溝 19

溝 19 は、東西トレンチ中央部に位置する南北溝である。

両端部がトレンチ外に広がることから、本来の規模は不明であるが、検出規模は幅 6.5m、長さ 6m、深さ 0.3m を呈する。西の肩は堤状遺構の東肩と共に有する。溝北部の底面には人間の足跡痕跡が認められる。遺物は、弥生土器の器台などが出土したが、固化可能なものはない。

第 4 面

TP+0.1 ~ 0.5m で検出した遺構面である。南北トレンチではトレンチを北

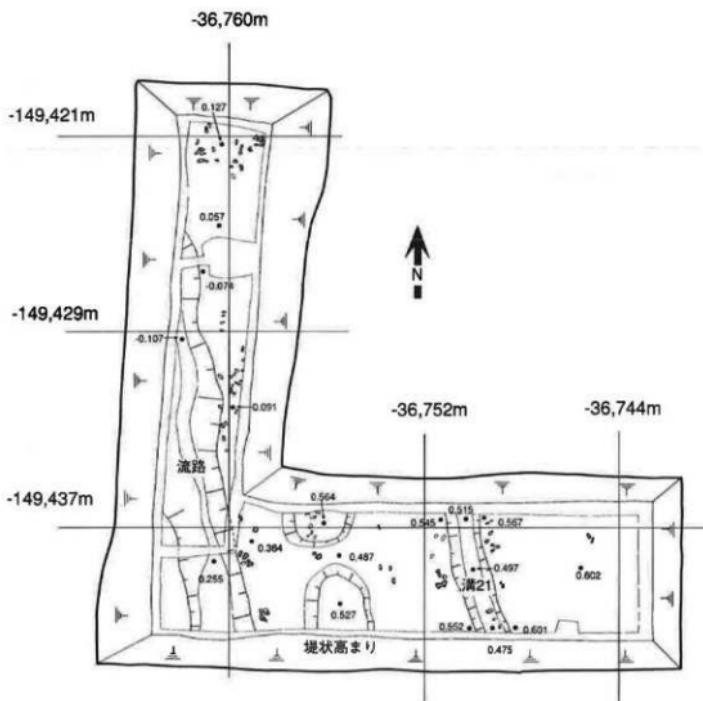


図 92 第 4 面遺構平面図



図93 第4面全景 北から

北西-南東方向に縦断する流路と、その周辺部に散在する人間の足跡を検出し、東西トレンチでは、中央が途切れた堤状を呈する高まりや、南北方向の溝およびその周間に散在する人間の踏み込み跡を検出した。

南北トレンチ 流路

トレンチ南端（東西トレンチ西端部含む）から北部南よりにかけて、座標北から8度西にふる方位をとる流路を検出した。南北両端はトレンチ外に広がるために本来の規模は不明であるが、検出規模は長さ16m、幅2.5m、深さ0.1mを呈する。流路内から遺物の出土はない。

流路の東岸の中央～南部にかけての部分およびトレンチ北端部分には、人間の足跡が集中して認められた。しかし、流路内には足跡が認められない。

この流路の上位には、河道Xが堆積させた砂層が南北トレンチをほぼ全域覆うように存在したが、前述の通り河道Yの砂層と誤認して、機械により掘削したため全容は不明である。

堆積層の観察から、トレンチ内にたまつた砂層は、トレンチ西外方に流路を持つ河道Xが、北東に回り込むように流れながら、西から東へ溢れた状態で砂層を溜めていったことが看取される。したがって、直接的にこの流路に沿つて河道Xが突っ込んだのではない、「ミズミチ」としての役割の一端を担つたと考えられる。

東西トレンチ



図 94 南北トレンチ北端踏み込み
検出状況 西から（上）



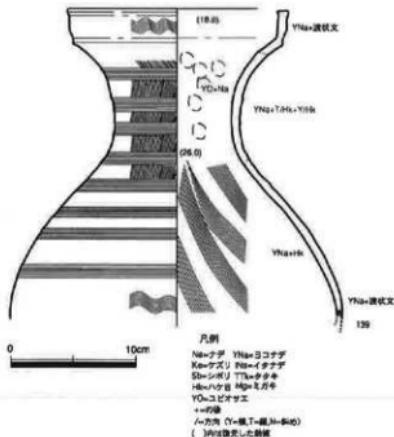
図 95 第4面南北トレンチ全景
南から（右上）

図 96 第4面東西トレンチ全景
南西から（右下）



図 97 第4面検出中
出土遺物実測図

図 98 第4面検出中
出土遺物



堤状高まり

トレンチの西部、流路南端の東側で、堤状の高まりを検出した。

高まりは、流路に沿った方向であるが、南北両端がトレンチ外に広がることから、本来の規模は不明である。また、中央部分は分断される。検出規模は、分断部分を繋いだ全長が5m、高まりの上端で幅2mを呈する。高まりの分断された北側と分断部分の底には、人間の足跡が認められることから、この分断部分は当初より意図的に作られたものと考えられる。断面の観察からこの高まりは、盛り土をしたのではなく、ベースの粘土層を削り出して作ったものと考えられる。

溝 21

トレンチ中央東よりの部分で、方角的に流路とほぼ同方向の南北溝を検出した。溝の南北両端は、トレンチ外に広がるため、本来の規模は不明であるが、検出規模は、長さ5m、幅1.5m、深さ約0.1mを呈する。

溝の両岸および南側底部には、人間の足跡が多数認められる。溝内から遺物の出土はない。

第4面は、南北・東西両トレンチの遺構内から遺物の出土はなく、いずれの遺構も時期の詳細については不明であるが、第4面検出中に弥生時代中期後半（第IV期）の特徴を有する壺（図97・98）が出土しており、それ以前に埋没した遺構面であることがわかる。

V. 自然化学分析

若江北遺跡出土木製品の樹種同定
パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

若江北遺跡は、河内平野の中央に位置する弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡であり、東側に隣接する巨摩庵寺遺跡と同じ遺跡と考えられている。今回の発掘調査では、弥生時代後期の河道や古墳時代の遺物・構造などが検出されており、その中には木製品も認められている。今回は、出土した木製品のうち、古墳時代初頭と考えられるナスピ形木製品と弥生時代後期の旧河道より出土した手斧の柄について樹種同定を行う。

1. 試料

試料は、古墳時代初頭（庄内期）の土壙から出土したナスピ形木製品（No.1）と弥生時代後期の河道から出土した手斧の柄（No.2）である。

2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・板目（放射断面）・板目（縦断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

ナスピ形木製品はシキミ、手斧の柄はコナラ属コナラ亜属クヌギ節のそれぞれ同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris sp.*) ナキ科

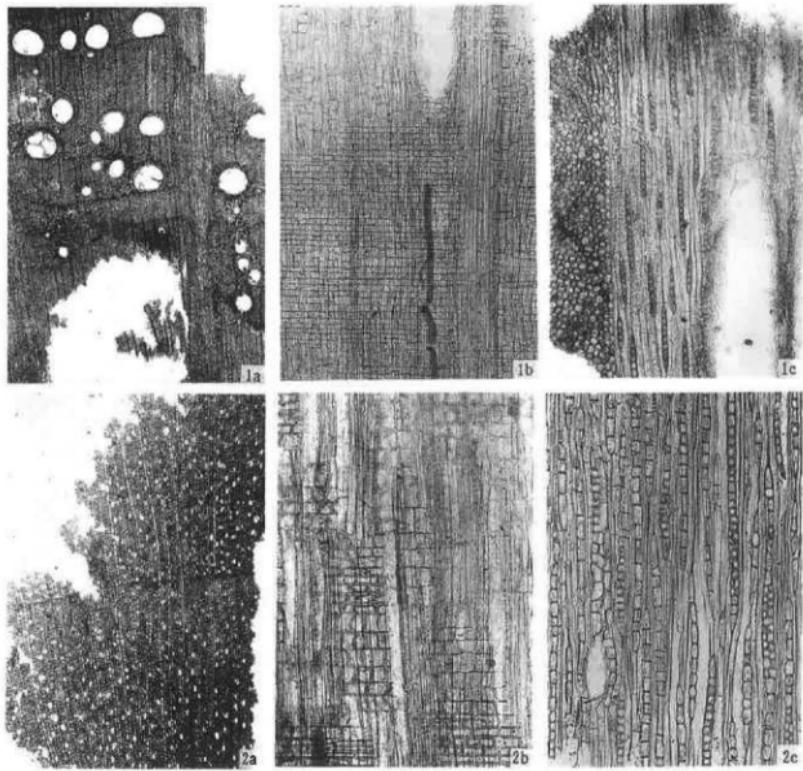
環孔材で孔間部は1～3列、孔間部外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

- ・シキミ (*Illicium anisatum L.*) シキミ科シキミ属

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II～I型、1～2細胞幅、1～20細胞高。

4. 考察

試料は、ナスピ形木製品がシキミに、手斧の柄がクヌギ節にそれぞれ同定された。このうち、ナスピ形木製品については、用途等に関する詳細が不明なため、その用材選択については不明である。手斧の柄は、これまでの調査例でもクヌギ節やアカガシ亜属などの強度の高い木材が数多く認められている。試料の用途を考慮すれば、強度の高い木材が適材であったと考えられ、今回の結果も既往の資料と調和的である。



1. コナラ属コナラ亞属クヌギ節（試料番号2）

2. シキミ（試料番号1）

a : 木口, b : 番目, c : 板目

図 99 木材切片顕微鏡写真

VI.まとめ

今回の調査において、明らかになった点について述べ、まとめにかえたい。

導水施設

第1面で検出した溝1は、間に1ヶ所の井戸4を経由（今回の調査範囲内で）して、トレンチ南端の井戸2に取り付く南北溝で、竹管を溝の底に這わせる構造をもつ。

井戸2は、北からの竹管取り付け口意外に取り付け口は認められないこと。また井戸4の取り付け口の位置にくらべると、ほとんど底に接して取り付け口があることなどから、井戸4との構造の違いは明らかで、この施設の終点と考えて大過ないと思われる。

また溝1は、トレンチ北端から南端にかけて北高南低の竹管の傾斜と、井戸との関係からトレンチ北外方にあると推定される何らかの水源から、浄化施設（井戸4）を通過して、井戸2にその水を送る導水施設であったと考えられる。

しかし、疑問が残らないわけではない。この施設周辺には、それが稼動した時期と考えられる人家の痕跡は認められず、堆積層からも耕作域と考えられる事から、農業用水としての利用が想定されるが、果たして農業用水にここまで水質浄化と、それに伴う手の込んだ施設の設置が必要だったのか、この点については、類例の増加を待ち、今後の課題としたい。

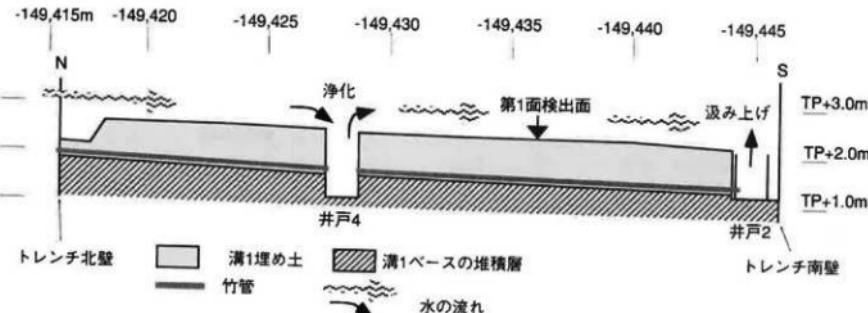
周辺で検出された類例としては、平成元年度に東大阪市友井3丁目で行った弥刀遺跡第6次発掘調査において、竹管を使用した同様の施設が出土した。

井戸5

井戸5は、縦板組タガ巻きタイプを上部構造に、縦板組隅柱横棟止めタイプを下部構造にもつ井戸であるが、若江北遺跡第3次調査においても、上下2段で構造を越えたほぼ同様の井戸が出土している。

この井戸も導水施設同様、周間に建物の痕跡を示す遺構が認められないことから、耕作に伴う野井戸的な存在であったと考えられる。またこの井戸の堀方内の4隅からは、柱穴の痕跡が認められたことから、上部に構造物を伴う井戸であったことがわかったが、どういった構造物であったのかは、判然としな

図100 導水施設模式図



い。はねつるべ状の上部構造であれば、東大阪市周辺では現代でも農業用水として使用されていることから、この井戸の性格として理解できる。

第1面の時期としては、遺構からの遺物の出土が少なく、各遺構の詳細な時期について判断しがたい。

導水施設・井戸5についても、時期差を判断する材料に乏しいが、井戸の形態と染め付け等の出土遺物から、近世以前に遡らないことは明らかである。

第2面

ピット

第2面では溝やピット・土坑など多くの遺構を検出したが、遺構間の切り合いで関係から、おおよそピットは溝や土坑埋没後に掘り込まれた遺構であることがわかった。

ピット内からその埋没時期を特定できうる遺物の出土がほとんど認められず、ピット同士の前後関係は明らかにできない。

しかし、ピットはその規模や堆積土の違い、あるいは建物跡として組み合わされた時の方角の違いなどから、複数の時期のものが存在していることも明らかである。

溝

トレンチ中央部に2条の南北溝を検出したが、そのそれぞれに水溜め状の落ち込みを経由する構造である。落ち込み部分や溝本体には多くの遺物が投棄される。南北溝は浚渫された形跡が認められるものもあり、比較的長期の利用を想定できる。

東西溝は南北溝14以西に認められるが、以東の部分には認められない。また東西溝の規模は、南北溝の規模に比較して小さく、検出途上で消滅するものも多い。したがって、東西溝は耕作に伴う溝であり、南北溝は、土地の利用区分を区画する溝としての性格が考えられる。

ナスピ形木製品

ナスピ形木製品は、多くの遺物とともに土坑10より出土した。残念ながら着柄方法が不明のため、「又ぐわ」なのか「組み合わせすき」(黒崎1985)なのかは判然としない。しかし、上原の指摘(上原1991)から今回の遺物を見直すと、「踏み込む」ためには着柄部直下の部分の張りが少ない。同様に組みであるが故に「すくう」動作の際にも効率はよくないと思われることから、農具と考えるならば、鍼身と考えるのが妥当である。

自然科学分析の結果ではシキミ製であった。シキミは通常弥生時代などでは、櫛や杵に使用され、現代では旋作の棒類や、寄せ木・念珠・傘の柄・薪炭などに使用される。鬼虎川遺跡などで出土する木製農具(主に鍼や歯)で使用される材質ではない。

土坑10は、粘土層とシルト層で充填された遺構であり、その堆積環境は當時滞水していたことがわかる。したがって、井戸であった可能性も考えられる。

本文でも述べたとおり、土坑10は数回に渡って埋没する。それは15層と13層の間に14層が、13層と11層の間に12層が、10層と8層の間に9層がそれぞれ南から流れ込んで堆積することからも明らかのように、遺物を含

んだ各層の間に間層が挟まって、時間を区切る空間があったことがわかる。ナスピ形木製品は、その中でもカメ(91)の埋没後で小形丸底壺(78)や高壺(83)などの埋没以前という比較的の限定された時間幅の中で埋まつた遺物といえる。

今後、炭素14年代法や年輪年代法のさらなる発展、もしくは新たな年代測定法などの開発が進み、このナスピ形木製品の年代がわかれれば、土坑内遺物の年代特定が可能になるかも知れない。

第3面

河道の埋没状況

第3面の北部と第4面の上位には、河川堆積物が厚く堆積していた。平面および断面の観察によって、それらの堆積した状況がわかった。

若江北遺跡の成り立ちを考える上において、これら河道の埋没状況の把握は最も重要であると判断し、そのプロトタイプを復元し、模式図に表した。

流路(図101-1)

弥生中期の後半以前、全体に水浸かりで、ぬかるみ状態のベース面に、南東-北西方向の流路が北流し、その周辺を人々が動き回る。ベースを削り込んで、堤状の高まりを流路の東側に作る。流路の増水に対するものかは、検出範囲も狭く明確にはできない。またこの流路も水位を下げるために人間が掘削したのかもしれない。

河道Xの埋没(図101-2)

恐らくトレンチの西外方に流芯を持ち、規模など詳細が不明な河道Xが、南から南北トレンチの北端を掠めるように、緩やかにカーブしながら北東に多量の砂を含み流れれる。この時、流芯の東側に溢れた砂を含んだ流れは、南北トレンチのほぼ全域を覆うように(第4面埋没)、東に砂を溜めながら北流する。結果南西-北東方向の自然堤防を発達させた。そしてその東側には後背湿地が広がる。

河道Yの進入(図101-3)

河道Xの活動により南北トレンチ南西に出来上がった自然堤防の高まりを利用して、堤状構造を作る。これについても、どの河道に対応したものかは不明である。

トレンチの北端部では、東より河道Yが進入し自然堤防の北側を浸食した。

河道Yの南岸(自然堤防との切り合う部分)には人間によって改変された形跡が見られることから、この河道自体的に作られた可能性も考えられるが、検出範囲が狭く推測の域を出ない。

河道Yが砂を堆積させていく途中で、人間が堤防作成に着手する。この人工の盛り土内に構築された構造物が護岸施設である。

護岸施設は、河道Yが最初に溜めた砂層の上に、粘土やシルトで鳥状の高まりを作る。その高さが0.8mに達したところで、上面の平坦部にH字形に丸太材を組み、各材の端部と組み合わせ部分に杭を打ち止める。南の斜面に数本の杭を「H」の中の横棒に持たれかけるように斜めに打ち込む。その後また粘土とシルトでそれらを覆うように盛り土をする。

その上面には多数の足跡が残されており、東からの流れの中で、南の斜面にしか杭を打ち込んでいない作業状況から、作成途中で砂の堆積速度が早まったのか、作業の中止を余儀なくされ放棄したものと考えられる。その際、作成途中の東側とも分断されたと思われる。

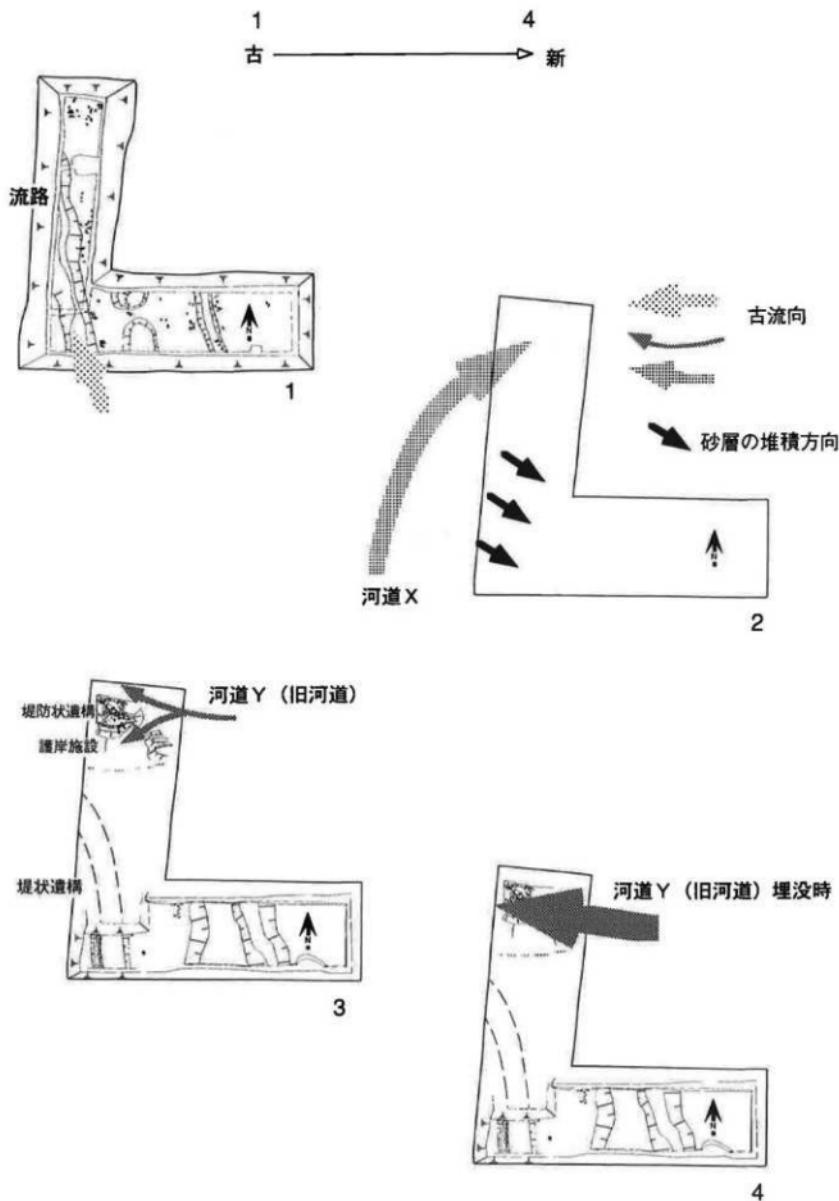
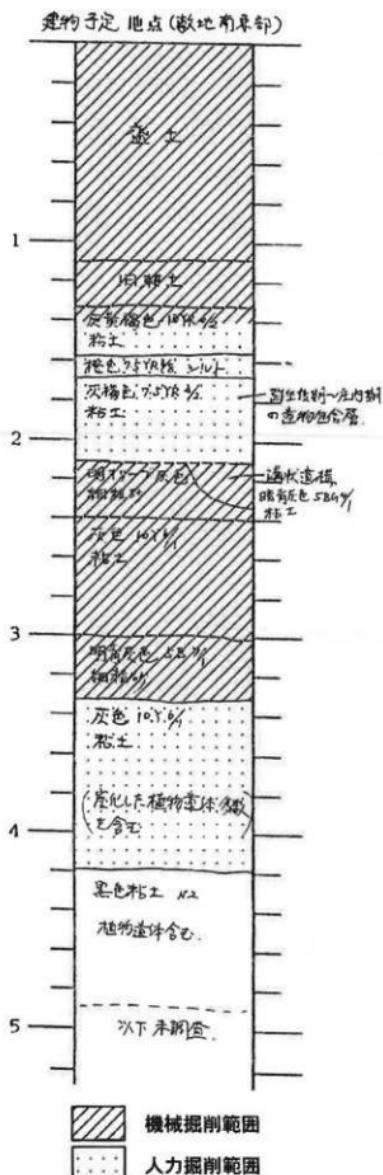


図 101 弥生時代中期 - 後期の河川活動と遺構の形成モデル図



河道Yの埋没 (図101-4)

堤防状造構の飲み込むように激しい流れが東から西に一気に河道Yを流れる。

この河道埋没以降、調査区から河川による堆積物は見られなくなる。

河道Yは、南岸部分の一部がトレンチの北端を掠めたに過ぎず、その流芯や本来の規模は不明である。しかし、東からの大きな流れであったことは明らかで、出土遺物や上位・下位の造構面との検討から、弥生時代後期に限定できる河道であるといえる。

第4面

上記第3面のところでもふれたように、ぬかるみの上に形成された造構面で、水際を行き交う人々の足跡が顕著である。

上位の河道Xが入り込む前に、北流する流路が存在した。また流路に並行して、削り出しの高まりが存在し、流路に対しての存在かは不明であるが、高まりより東の部分に溝が存在することから、土地の利用を区画する性格のものであったのではないだろうか。

以上、今回の調査において明らかになった点と、弥生時代中期から後期にかけての地形発達の復元を試みた。

最後に、今回の調査の基礎データになった試掘データを掲載する(図102)。試掘坑は調査区の南東部にある(図8参照)。

試掘データは、通常手書きの柱状図で現地の記載がそのままデータとなる。その際写真撮影は行われない。

掲載したものは、今回の調査に際して使用されたものであり、コンピュータに取り込んでそのまま出力したものである。ただし、識別しやすいように調査に際して市教委から指導のあった、人力掘削部分と機械掘削部分にトーンをかけた。

図102 試掘データ

参考文献

- 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第5号 1982 史学研究会
尾上実・中井貞夫・大谷治孝・奥和之・高橋雅子・瀬川純・安田喜憲・藤原広志・粉川昭平・藤下典之・川村三郎・船倉巳三郎・松田隆嗣・安田博之・奥野礼子『若江北・近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』1983 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
原田修『若江北遺跡・桙蔭東学園校舎建設に伴う遺跡調査報告-』1985 財団法人大阪市文化財協会
尾上実・岸本道昭・高橋雅子・三辻利一『巨摩・若江北（その2）-近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』1984 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
村上年生・若林邦彦『巨摩・若江北（その3）発掘調査概要-都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設工事に伴う巨摩・若江北遺跡埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』1993 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
松田順一郎「八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達」『小阪合遺跡』 財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集 2000 財団法人大阪府文化財調査研究センター
黒崎直「くわとすき」「弥生文化の研究 5 道具と技術」p77～84 1985 雄山閣
上原真人「稲作の道具とまつり」「季刊考古学 第37号 稲作の農耕と弥生文化」p46～52 1991 雄山閣
池崎智嗣「木からつくる」「手づくりの時代」 発掘調査成果展図録 p12・13 1994 財団法人大阪市文化財協会
才原金弘・上野利明「II 弥刀遺跡第6次発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報集（2）1998年度」 1999 財団法人大阪市文化財協会

報告書抄録

書名	若江北遺跡第4次発掘調査報告
ふりがな	わかえきたいせきだい4じはくつちょうさほうこく
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	池崎智詞・パリノ・サーヴェイ株式会社（V章）
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
郵便番号	577-0843
所在地	大阪府東大阪市荒川2-28-21
電話番号	06-6736-0346
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行年月日	2001.12
遺跡名	若江北遺跡
遺跡名ふりがな	わかえきた
遺跡所在地	東大阪市若江西新町3丁目12-4・12-17
所在地ふりがな	ひがしおおさかわかえにしんまち3ちょうめ12-4・12-17
市町村コード	27227
北緯	34 39 0.82
東経	135 35 56.4
調査期間	1992.01.31～1992.06.12
調査面積	629m ²
調査原因	石山康一・石山昌広
種別	
主な時代	弥生時代中期から古墳時代初頭・近世
特記事項	弥生時代中期の流路と人間の足跡 弥生時代後期の自然河川とそれに伴う護岸施設。 弥生時代後期から古墳時代初頭の溝・土坑などの遺構と多量の土器。 ナスピ形木製品。 近世の竹管を使用した導水施設。

若江北遺跡第4次発掘調査報告

2001年12月

発行 財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21 TEL.06-6736-0346

印刷 株式会社 ミラテック

〒534-0025 大阪市都島区片町2丁目9番9号 TEL.06-6354-3081

紙質 表紙 ビルカラートノコ 220Kg 本文 ニューエイジ 57.5Kg

製本 無線綴じ